

第7章

野宿期間

7.1 はじめに

近年の野宿生活者の野宿期間が長期化しているのか否か、長期化しているのならばどの程度長期化しているのか。残念ながら今回のデータからこれらの問いについて答えることはできない。今回の調査と同様の対象者を設定してなされた調査はこれまでなかったからである。しかし、既に「第3.2.4項 野宿期間（29ページ）」で述べているように、1998年「西成労働福祉センター夜間開放利用者」の野宿期間に比べると今回の調査協力者の野宿期間は明らかに長くなっている。夜間開放利用者の71.0%（有効回答者811人中）が「7ヶ月未満」の野宿期間であるのに対して、今回の調査協力者で野宿期間が「8ヶ月未満」である割合は23.1%に過ぎないのである。

では野宿期間の長期化は野宿生活やニーズに何らかの影響をもたらすのか否か、影響をもたらすのならばどのような影響をもたらすのだろうか。本章で検討する中心的課題はこの野宿期間が野宿生活、ニーズにもたらす影響である。調査対象者の野宿期間と現在の野宿生活・ニーズとの関係から、野宿期間がもたらす影響について検討していく。

ここで用いるデータは、調査対象者個人の野宿生活やニーズの継時的変化についてのデータではないため、野宿期間が野宿生活・ニーズにもたらす影響を厳密に表現しているとは言い難い。しかし、野宿生活やニーズに影響する野宿期間以外の変数を考慮しつつ見ていくなれば、野宿期間が野宿生活やニーズにもたらす影響について大まかに把握することは可能であろう。

本章のもう1つの課題は、近年の野宿生活者が若年化している、あるいは釜ヶ崎などの寄せ場を経由しないで「ふつうの仕事」から直接野宿に至っている割合が増加しているといった、野宿生活者の「属性」における変化が生じているのか、生じているのならばどのような変化であるのかを明らかにすることである。野宿開始時期と年齢、職歴-釜ヶ崎就労経験の有無-との関係を検討していく。

野宿期間、野宿開始時期としてはいずれも第II部第4章（58ページ）であげた「野宿期間」変数を用いる。繰り返し述べるならば「8ヶ月未満=1999年から野宿開始」「8ヶ月以上1年8ヶ月未満=1998~99年から野宿開始」「1年8ヶ月以上3年8ヶ月未満=1996~1998年から野宿開始」「3年8ヶ月以上=1996年以前から野宿開始」の4階層に野宿期間=野宿開始時期を区分したものである。

7.2 野宿期間・野宿開始時期と野宿生活者の属性

7.2.1 野宿期間と年齢区分

（表7.1）（図7.2）は野宿期間と年齢との関係を表している。（表7.1）には野宿期間階層それぞれの平均年齢を合わせて示している。

これらからは野宿期間が長期である層ほど高齢である傾向を見いだすことができる。しかし、この傾向は

高齢であるほど野宿生活が長期化しがちであることを表しているわけではない。隣り合う野宿期間階層間の平均年齢の差は1~2歳程度でしかないのである。このことは初野宿時期と初野宿時の年齢との関係を表した(表7.2)を見るとより一層はっきりとする。(表7.2)を見ると初野宿時期が1996年以降の層の初野宿時の平均年齢は54歳前後であるのに対して、初野宿時期が1995年以前の層では初野宿時の平均年齢は50歳であるという差を有意な傾向として見いだせる。最も長期間野宿生活を送っている1995年以前に野宿生活を開始した層の野宿生活開始時の平均年齢が最も低いのである。また、1996年以降野宿生活を始めた3階層においては野宿開始時期によって年齢には全く有意な差は見られない。

今回の調査協力者の全体的傾向としては、野宿開始時の年齢が高いほど野宿期間が長期化するという傾向は見いだせない。野宿期間と年齢との関係は、高齢野宿生活者ほど野宿期間が長期化するという因果関係によってもたらされたわけではないのである。これは高齢野宿生活者であっても野宿生活から退出することが可能であることを表しているわけではない。そうではなく、これらは一旦野宿生活を送らざるを得ない状況になれば年齢に関わらず野宿生活からの退出が極めて困難であることを表しているのである。

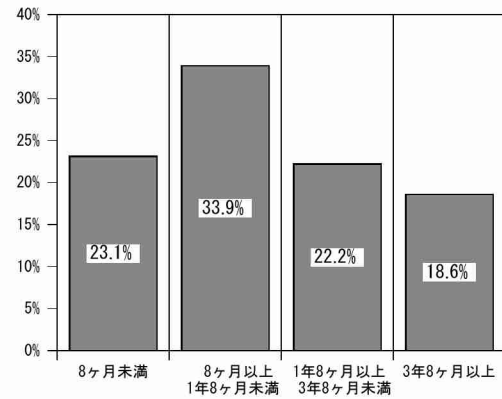


図 7.1: 野宿期間

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
45歳未満	22 14.4%	21 9.2%	6 4.1%	6 4.8%	55 8.4%
45歳以上 55歳未満	64 41.8%	79 34.6%	54 37.0%	34 27.2%	231 35.4%
55歳以上 65歳未満	56 36.6%	102 44.7%	68 46.6%	57 45.6%	283 43.4%
65歳以上	11 7.2%	26 11.4%	18 12.3%	28 22.4%	83 12.7%
列合計 比率	153 23.5%	228 35.0%	146 22.4%	125 19.2%	652 100.0%
平均年齢	53.6歳	55.1歳	56.5歳	58.6歳	
Test	ChiSquare		Prob>ChiSq		
Likelihood Ratio	30.654		0.0003		
Pearson	31.471		0.0002		

表 7.1: 野宿期間と年齢分布

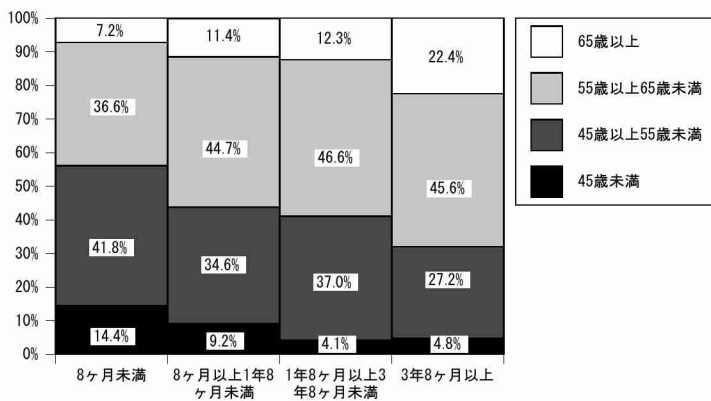


図 7.2: 野宿期間と年齢分布

野宿開始時期	人数	平均年齢	Std Error
1999年1月以降	149	53.5	0.68
1998年1月から1998年末	228	54.1	0.55
1996年1月から1997年末	146	54.2	0.69
1995年末以前	125	50.0	0.74
F Ratio	7.8649	Prob>F	<.0001

表 7.2: 野宿開始時期と野宿開始時の年齢

7.2.2 野宿開始時期と釜ヶ崎での就労経験の有無

(表 7.3) は、野宿開始時期と釜ヶ崎就労経験の有無との関係を表している。それぞれの時期に野宿を開始したグループにおける釜ヶ崎就労経験の有無の比率を表しているのであり、それぞれの時点での野宿生活者全体における釜ヶ崎就労経験の有無の比率を表しているわけではない。

度数 列%	1995 年末 以前	1996 年 1 月 から 1997 年末	1998 年 1 月 から 1998 年末	1999 年 1 月 以降	行合計 比率
釜ヶ崎就労 経験あり	72 57.6 %	107 71.8 %	127 55.7 %	75 48.4 %	381 58.0 %
釜ヶ崎就労 経験なし	53 42.4 %	42 28.2 %	101 44.3 %	80 51.6 %	276 42.0 %
列合計 比率	125 19.0 %	149 22.7 %	228 34.7 %	155 23.6 %	657 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 18.51 0.0003
Pearson 18.05 0.0004

表 7.3: 野宿期間と職歴

まで減少している。

では、「1995 年末以前から」野宿を開始したグループはこの近年になって野宿を開始したグループほど釜ヶ崎を経由していない割合が高いという傾向から外れているのは何故だろうか。本章で用いる初野宿時期とは「現在につながる野宿生活が常態化した時期」である。従ってたとえば「数ヶ月野宿生活を送っていたが、飯場に入ることができ、数ヶ月飯場に入った。その後飯場を出てから再び野宿生活を過ごすようになり、現在に至る」といった者の場合、初野宿時期は飯場を出てから始まった野宿生活の開始時期を指している。1995 年 1 月の阪神・淡路大震災は釜ヶ崎への求人を激増させた。「1995 年末以前から」野宿生活に入っていた釜ヶ崎の失業日雇労働者もこの求人増によって一時的に野宿からの退出が可能となった者も多数いたであろう。このような者の初野宿時期は、野宿から一時的に退出した後、再び野宿生活に戻らざるを得なくなった時期となる。つまり、「1995 年末以前から」野宿を開始したグループにおける釜ヶ崎での就労経験を有する割合の低さは阪神・淡路大震災の求人増と本章における初野宿時期の定義の仕方によってもたらされたものではないかと考えられる。

いずれにせよ、1996 年以降に野宿を開始したグループにおいては、近年になって野宿を開始したグループほど釜ヶ崎を経由しないで野宿に至る割合が高くなってきていることは確かである。とはいえ、釜ヶ崎を経由しない層の大部分がマスコミなどでしばしば取り上げられているような「リストラされたサラリーマン」「倒産した中小企業の社長」といった言葉でイメージされる職業キャリアを持っていないことは後述される「第 15 章、279 ページ」から明らかである。また、近年野宿生活を開始するグループにおいて釜ヶ崎を経由する割合が減少しているとは言え、その割合は 5 割近くに達しており、釜ヶ崎が野宿生活者の給源として極めて重要な存在であることに変わりない（第 9 章、140 ページ）。

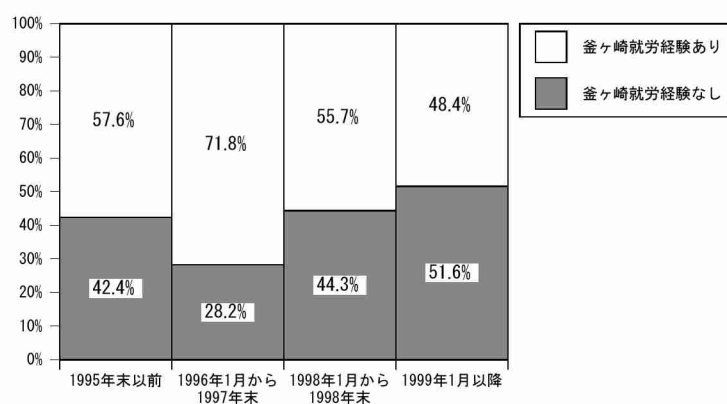


図 7.3: 野宿期間と職歴

7.3 野宿期間と求職活動

7.3.1 野宿期間と転職希望

(表 7.4) (図 7.4) は野宿期間と「転職」希望との関係を表している。「転職」希望とは現在している仕事

以外の仕事に就きたいか否かを表している。それは野宿生活における「転職」と言うより、野宿生活から抜け出すために、新たな仕事に就くことを希望しているか否かを表している。これらを見ると野宿期間の長期化と「転職」を希望する割合の低さが結びついていることが分かる。野宿期間が1年8ヶ月未満の2階層では「転職」希望は9割に達しているが、野宿期間が3年8ヶ月以上になるとその割合は7割弱程度である。この野宿期間の長期化と「転職」を希望する割合の減少の結びつきは釜ヶ崎での就労経験の有無に関わらず見いだせる傾向である。

ではこの傾向は、低い就労意欲の当然の帰結として野宿期間が長期化しているのだと解釈されるのだろうか。恐らくそれは因果を逆転させている。そうではなく、野宿期間の長期化の結果として転職を希望する割合が減少しているのではないだろうか。

野宿生活を抜け出すことを可能とするような仕事に就くことができなかつたため長期間の野宿生活を営まざるを得なかつた者が、新たな仕事に就くことによる野宿生活からの退出の可能性を高く見積もることは困難であろう。労働市場から排除された野宿生活者が、新たな就労による野宿生活からの退出を実現可能なものと見なすことには困難が伴うだろう。つまり、「転職」を希望しないことは、「働きたくない」ということを

意味しているのではなく、「働くことができない」ということを意味しているのであると考えられるのである。そしてその「働くことができない」とは、実際に身体が思うように動かないといったことだけではなく、自らを労働力として「無用」視する労働市場における「評価」を内面化したものであろう。

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
転職を希望する	14 9.3%	22 9.8%	23 16.0%	40 32.3%	99 15.4%
転職を希望しない	136 90.7%	202 90.2%	121 84.0%	84 67.7%	543 84.6%
列合計 比率	150 23.4%	224 34.9%	144 22.4%	124 19.3%	642 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 32.676 <.0001
Pearson 36.633 <.0001

表 7.4: 野宿期間と転職希望

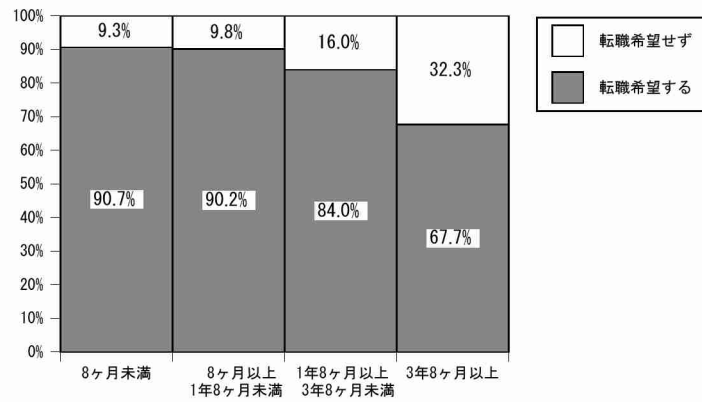


図 7.4: 野宿期間と転職希望

7.3.2 野宿期間と求職活動

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
探している	90 58.4%	121 53.3%	63 42.6%	28 22.6%	302 46.2%
探していない	64 41.6%	106 46.7%	85 57.4%	96 77.4%	351 53.8%
列合計 比率	154 23.6%	227 34.8%	148 22.7%	124 19.0%	653 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 44.434 <.0001
Pearson 42.504 <.0001

表 7.5: 野宿期間と求職活動の有無

(表 7.5) (図 7.5) は、野宿期間と現在の求職活動の有無との関係を表している。

求職活動を行っている割合は、野宿期間が長期である層ほど低くなっている。この傾向は、野宿期間の長期化の結果としてもたらされたのではないかと考えられる。また、この傾向も釜ヶ崎での就労経験の有無に関わらず見いだすことができる。この傾向は先述した野宿期間と「転職」希望との関係と一致している。

従って、野宿期間が長期である層ほど求職活動を行っている割合が減少している傾向の一部は、野宿期間の長期化によって労働商品としての「自己評価」を下げざるを得ない結果、新たな就労による野宿からの退出現を可能と見なせないことによってもたらされている。

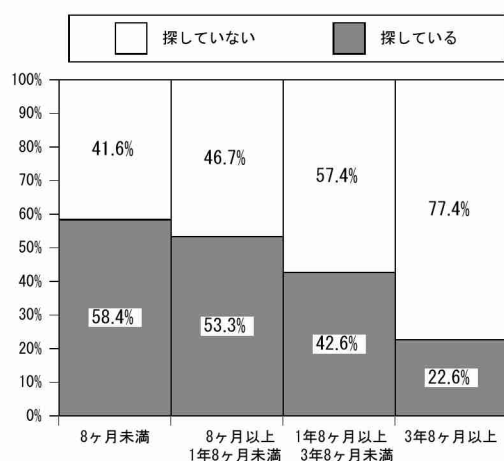


図 7.5: 野宿期間と求職活動の有無

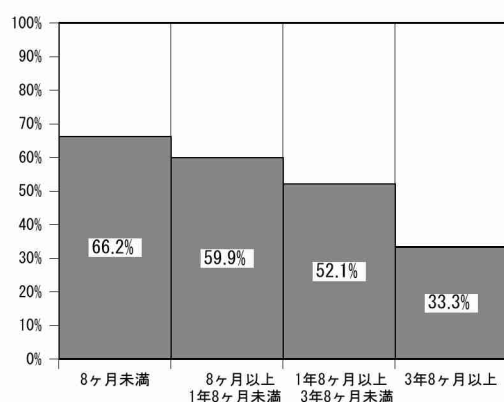


図 7.6: 野宿期間と転職希望者中の求職活動実施率

しかし、この傾向は、野宿期間の長期化に伴って「転職」を希望する割合が減少することによって直接的にもたらされたのではない。(図 7.6) は転職を希望する者の内、実際に求職活動を行っている割合を野宿期間別に表したものである。ここには野宿期間の長期化に伴ってその割合が減少していることが示されている。転職を希望する割合の減少よりも、実際に求職活動を行っている割合は大きく減少しているといっているのである。

多くの野宿生活者は次のように語っていた。「何でもいからまともな仕事に就きたい。自分は十分働ける。しかし、雇ってくれないのである」。転職を希望しながら求職活動をしないのは、野宿からの退出現を可能とする新たな仕事に就きたいにも関わらず就けないから求職活動をしないのであろう。野宿期間とは、野宿からの退出現を可能とする仕事に就くことができなかった期間である。長期に渡って仕事に就くことができなかった事実によって、長期野宿層は例え求職活動をしたとしても仕事に就くことがほとんど不可能であることを知っている。自らの労働力を無価値であるとは見なしていないとしても、現時点において就労による野宿からの退出現が実現可能であると考えすることもできないだろう。実際に求職活動を行うには時間や体力を費やさなければならない。彼らは求職活動より少しでも多くのアルミ缶を集めることに時間と

体力を使うことを選ぶだろう。

野宿期間の長期化が「転職」希望の割合以上に求職活動を行う割合を減少させるのはそのような実現可能性についての見積もりによるのだと考えられる。

7.3.3 野宿期間と釜ヶ崎での求職活動

これまで求職活動全般について見てきたが、次に釜ヶ崎（あいりん地域）での就労経験のある者のみを取り出して、釜ヶ崎での求職活動について検討していく。野宿期間は釜ヶ崎での求職活動の有無とどのような関係にあるのだろうか。

釜ヶ崎で日雇労働者として生活していた者にとって釜ヶ崎—つまり、釜ヶ崎から日雇仕事に就きドヤに泊まる、あるいは飯場に入るといった生活—への帰還、野宿からの退出現の最も実現可能性の高い「出口」として認知されているであろうし、事実そうであろう。野宿と釜ヶ崎での生活の往還が可能であるのは日雇労働市場としての釜ヶ崎が「正常」に機能している状況であり、なおかつ野宿生活者本人が「必要」な労働力を保持している労働者と見なされていなければならない。これらが満たされない状況においては、釜ヶ崎への帰還は非常に困難になる。野宿期間が長期化した時、釜ヶ崎の失業日雇労働者と日雇労働市場としての釜ヶ崎との「距離」はどのように変化するのであろうか。

(表 7.6) (図 7.7) は野宿期間と現在釜ヶ崎で求職しているか否かとの関係を表している。野宿期間が長期である層ほど釜ヶ崎で求職活動をしている割合が減少する傾向、特に3年8ヶ月以上になると大きく減少している傾向を見いだすことができる。

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
求職している	41 56.2%	60 47.6%	49 45.8%	17 23.9%	167 44.3%
求職していない	32 43.8%	66 52.4%	58 54.2%	54 76.1%	210 55.7%
列合計 比率	73 19.4%	126 33.4%	107 28.4%	71 18.8%	377 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 17.507 0.0006
Pearson 16.747 0.0008

表 7.6: 野宿期間と釜ヶ崎での求職活動

野宿期間の長期化とは釜ヶ崎への日雇労働者としての帰還を可能とするような仕事に就けなかった期間に長期化である。野宿期間の長期化に伴って釜ヶ崎で求職する割合が減少する傾向は、アブレ（不就労）の長期化である野宿期間の長期化が日雇労働市場としての釜ヶ崎からの離脱をもたらしたのだと解釈できるのではないかと考えられる。しかし、その減少が生じているのは3年8ヶ月未満の3階層と3年8ヶ月以上の層の間である。野宿期間3~4年が釜ヶ崎の吸引力の限界、野宿生活者が釜ヶ崎に野宿からの退出の展望を見いだす限界であるのかもしれない。あるいは野宿期間ではなく、野宿開始時期がこの傾向をもたらしているのかもしれない。野宿期間3年8ヶ月以上、1995年末以前から野宿を開始している層と、それ以降から野宿を開始している層とでは野宿への入り方がいづらか異なっているのかもしれない。

いずれにせよ、就労による野宿からの退出を考える者にとって釜ヶ崎はかなり長期に渡って「出口」と考えられ続けている。3年8ヶ月未満の3階層において、野宿期間が長期化してもそれほど釜ヶ崎で求職している割合が減少しないのは、就労によって退出するために利用可能なそれ以外の「出口」が存在しないためであるのかしれない。

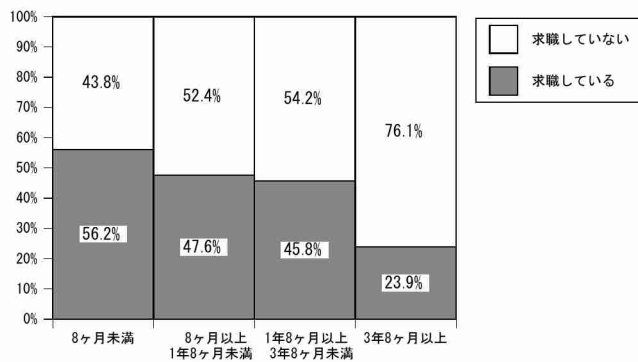


図 7.7: 野宿期間と釜ヶ崎での求職活動

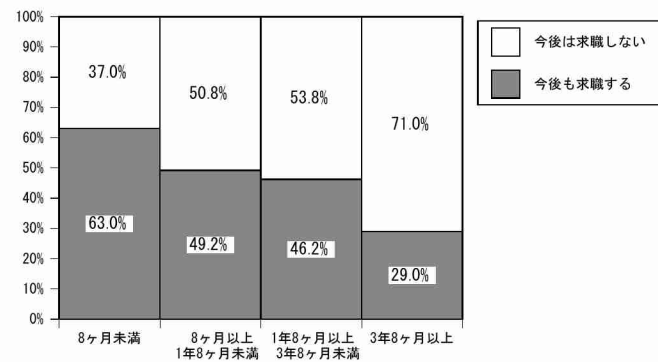


図 7.8: 野宿期間と今後の釜ヶ崎での求職

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
今後も求職する	46 63.0%	62 49.2%	49 46.2%	20 29.0%	177 47.3%
今後は求職しない	27 37.0%	64 50.8%	57 53.8%	49 71.0%	197 52.7%
列合計 比率	73 19.5%	126 33.7%	106 28.3%	69 18.4%	374 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 17.144 0.0007
Pearson 16.748 0.0008

表 7.7: 野宿期間と今後の釜ヶ崎での求職

次に野宿期間と今後釜ヶ崎で求職するか否かとの関係を見ていく。釜ヶ崎で求職しているか否かは釜ヶ崎からの就労による野宿からの退出の展望を見いだしていることを直接表しているわけではない。それを釜ヶ崎に見いだしていたとしても、その実現に長い期間が必要であると考えているなら、釜ヶ崎の求人が増える

にはまだしばらく必要であると考えているなら—今は釜ヶ崎で求職はしていないだろう。その点で今後釜ヶ崎で求職するか否かは、釜ヶ崎が就労による野宿からの退出のための「出口」と考えられているか否かをより直接的に表現していると考えられる。

(表 7.7) (図 7.8) は野宿期間と今後釜ヶ崎で求職するか否かとの関係を表している。ここでも、野宿期間と釜ヶ崎での求職活動の有無との関係が示す傾向と同様の、野宿期間が長期である層ほど釜ヶ崎で求職活動をしている割合が減少する傾向、特に3年8ヶ月以上になると大きく減少している傾向を見いだすことができる。

野宿期間の長期化は確かに日雇労働市場としての釜ヶ崎からの離脱をもたらしていると言えそうである。それは、野宿期間の長期化の過程が、釜ヶ崎が就労による野宿からの退出のための「出口」とはならないことを認知せざるを得ない過程であるからであろう。

7.4 野宿期間の長期化と「一定の型」を持った野宿生活の確立

7.4.1 野宿期間と野宿形態

既に「第6章 野宿形態と野宿生活、77ページ」で述べたが、野宿期間の長期化はテント野宿の割合の増加と結びついている。1年8ヶ月未満の野宿期間では、野宿期間が長期化するにつれてテント野宿の割合は増加する。ただし、1年8ヶ月以上になるとそれ以上、テント野宿の割合の増加は見られない。なぜ野宿期間の長期化がテント野宿の割合の増加と結びついているのかについては「第6章 野宿形態と野宿生活、77ページ」でいくらかの検討を行っているのでここでは触れない。

ここで指摘したいのは、野宿期間の長期化が<野宿生活を生きる>「生活の型」の確立、あるいは野宿生活を生き延びる資源の獲得をもたらすという点である。

テント・小屋掛けは私的空間を占有することができないが故に公共空間で野宿生活を営まざるを得ない野宿生活者にとってささやかに確保された「私的空間」である。テント・小屋掛けは冬の寒さをしのぎ、雨を防ぐ。その青いシートは路上では避けがたい「市民」のあからさまな忌避と排除のまなざしをいくらか防ぐ。公共空間の中でささやかに切り取られた「私的空間」は物質的諸資源の蓄積を可能とする。テント・小屋掛けとはテント野宿生活者が目覚め、アルミ缶や食料の回収に出かける、そして食事をし、野宿生活者仲間と談笑し、眠りにつく、そういったあらゆる生活の拠点である。テント野宿とは野宿生活から抜け出すことを強く願い行動しているにも関わらず、抜け出せない野宿生活者が、失われた私的空間を何とか取り戻そうとする営為であると言えるかもしれない。テント野宿という野宿形態は<野宿生活を生きる>「生活の型」の物質的現れであり、野宿生活を生き延びるために最も重要な資源の1つなのである。

野宿期間の長期化はテント野宿の割合の増加をもたらす。野宿期間の長期化は<野宿生活を生きる>「生活の型」の確立、野宿生活を生き延びる資源の獲得をもたらすのである。

7.4.2 野宿期間と仕事の有無

野宿生活において何らかの収入を得られる仕事を行っている割合は、野宿期間とどのような関係にあるのだろうか。(表 7.8) は野宿期間とここ1ヶ月間に何らかの収入を得られる行為、仕事を行ったか否かとの関係を表している。

野宿期間が8ヶ月未満の層と8ヶ月以上の3階層との間に有意な差が見られる。8ヶ月未満の層に比べ、8ヶ月以上の3階層では仕事を行っている割合が有意に高くなっている。「3年8ヶ月以上」の層では、仕事を行っている割合が「1年8ヶ月以上3年8ヶ月未満」よりいくらか減少しているが統計的に有意な差ではない。ここから野宿期間が長期化すると仕事を行っている割合が上昇する傾向を見いだすことができる。この傾向は野宿期間が8ヶ月未満の層のみ取り出して野宿期間と仕事の有無との関係を表した(表 7.9) (図 7.9) 見るとより一層はっきりする。仕事を行っている割合は4ヶ月未満の2階層に比べ4ヶ月以上の2階層

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
仕事あり	106 68.4%	196 86.0%	128 85.9%	101 80.8%	531 80.8%
仕事なし	49 31.6%	32 14.0%	21 14.1%	24 19.2%	126 19.2%
列合計 比率	155 23.6%	228 34.7%	149 22.7%	125 19.0%	657 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 20.445 0.0001
Pearson 21.838 <.0001

表 7.8: 野宿期間と現在の仕事の有無

で有意に大きくなっていることを見いだすことができるのである。

度数 列%	2ヶ月未満	2ヶ月以上 4ヶ月未満	4ヶ月以上 6ヶ月未満	6ヶ月以上	行合計 比率
仕事あり	15 51.7%	26 57.8%	39 79.6%	26 81.3%	106 68.4%
仕事なし	14 48.3%	19 42.2%	10 20.4%	6 18.8%	49 31.6%
列合計 比率	29 18.7%	45 29.0%	49 31.6%	32 20.6%	155 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 11.482 0.0094
Pearson 11.362 0.0099

表 7.9: 野宿期間と仕事の有無 (8ヶ月未満の者のみ)

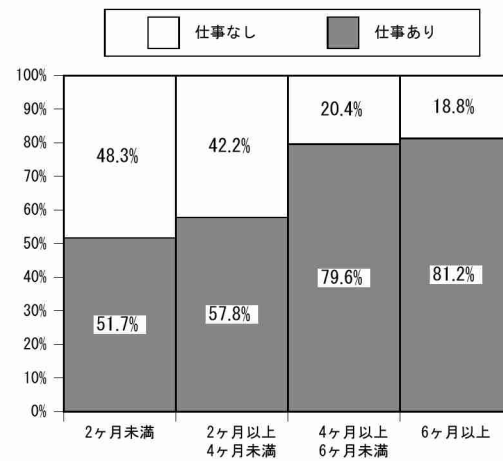


図 7.9: 野宿期間と仕事の有無 (8ヶ月未満の者のみ)

野宿期間の長期化に伴って仕事を行っている割合は増加する。但し、その増加は1~2年の間に生じ、それ以上期間が長期化してもその割合は変化しない。

野宿生活における仕事とは、ギリギリの「生活」、あるいは「生存」を維持することはできても、野宿生活からの「脱出」の契機となるものではない。そこで得られる収入とは極めて低いものなのである。その点を考慮すれば、仕事の有無が就労意欲、あるいは怠惰さを表わしていない。野宿期間が比較的短期である層では野宿生活を維持する仕事をするよりは、野宿生活からの退出を可能とする仕事を志向しているために仕事を行っている割合が低いのかかもしれない。あるいはそれは野宿生活における仕事を習得していないことによるのかかもしれない。野宿生活における仕事の大部分は既に述べられているように廃品回収であり、廃品回収し収入を得るためには様々な知識や情報、工夫と技術が必要である。

野宿期間の長期化によって野宿生活からの退出が非常に困難であると、あるいは退出により長い期間を要すると見積もるなら、当然、「生活」「生存」をより長期に渡って可能とするような、いづらかでも「快適」な「生活」を可能とするような野宿生活が志向されるだろう。野宿期間の長期化は、野宿からの退出についての見積もりを変化させると共に、収入を得るための知識、情報などの獲得をもたらす。結果、野宿期間の長期化は仕事を有している割合を上昇させる。仕事を有する割合の上昇は1年8ヶ月までの間に生じ、野宿期間がそれ以上長期化しても仕事を有する割合に有意な差は見られなくなる。ここからは、野宿からの退出に関する見積もりの変化や、収入を得るための知識、情報の獲得は長くても1~2年の間になされるのではないかと考えられる。

野宿生活において、その「生活」、あるいは「生存」を維持するために収入は重要で有用な「資源」である。そして金銭的収入はほとんどの場合、何らかの仕事によって獲得される。仕事をしている割合の上昇は収入を得ている割合の上昇である。野宿期間の長期化によって野宿生活の<一定の型>が確立される、あるいは野宿生活を生き抜くための資源がより獲得されているのだと考えられる。

7.4.3 野宿期間と食事

度数 行% 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率	P>Chi ²
炊き出し	16 28.1 % 10.4 %	18 31.6 % 7.9 %	15 26.3 % 10.1 %	8 14.0 % 6.5 %	57 100.0 % 8.7 %	1.894 0.5948
自炊	74 18.9 % 48.1 %	144 36.8 % 63.4 %	85 21.7 % 57.0 %	88 22.5 % 71.0 %	391 100.0 % 59.8 %	17.08 0.0007
食堂・弁当	50 26.6 % 32.5 %	79 42.0 % 34.8 %	32 17.0 % 21.5 %	27 14.4 % 21.8 %	188 100.0 % 28.7 %	12.115 0.007
廃棄食品	36 17.4 % 23.4 %	67 32.4 % 29.5 %	59 28.5 % 39.6 %	45 21.7 % 36.3 %	207 100.0 % 31.7 %	11.024 0.0116
残飯	8 15.1 % 5.2 %	9 17.0 % 4.0 %	17 32.1 % 11.4 %	19 35.8 % 15.3 %	53 100.0 % 8.1 %	17.311 0.0006
仲間から	32 25.8 % 20.8 %	51 41.1 % 22.5 %	19 15.3 % 12.8 %	22 17.7 % 17.7 %	124 100.0 % 19.0 %	6.303 0.0978
その他	19 25.3 % 12.3 %	29 38.7 % 12.8 %	14 18.7 % 9.4 %	13 17.3 % 10.5 %	75 100.0 % 11.5 %	0.63517 0.0027
列合計 比率	154 23.5 %	227 34.7 %	149 22.8 %	124 19.0 %	654 100.0 %	

表 7.10: 野宿期間と食事形態

極めて低い収入しか得ていない彼らは、現在の食事をいかに確保しているのか。(表 7.10) は野宿期間と食事形態との関係を表している。野宿期間と有意な関係が見られる食事形態は、「自炊」「食堂・弁当」「廃棄食品」「残飯」である。野宿期間と有意な関係が見られる食事形態についてのみ表したのが(図 7.10)である。「自炊」の割合は野宿期間の長期化に伴って増加している。「廃棄食品」「残飯」の割合は野宿期間が1年8ヶ月未満の2階層に比べ1年8ヶ月以上の2階層で高くなっている。「食堂・弁当」の割合は逆に野宿期間が1年8ヶ月未満の2階層に比べ1年8ヶ月以上の2階層で低くなっている。

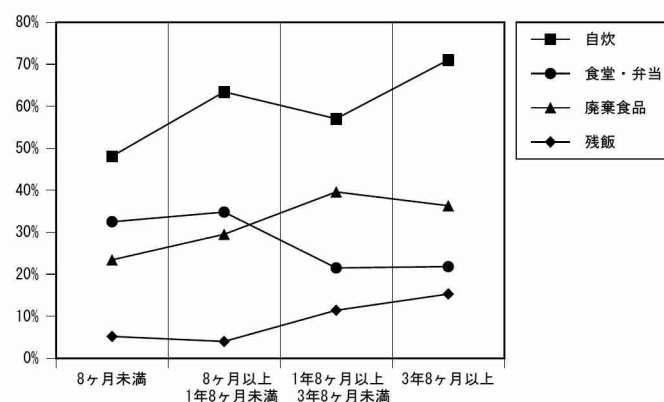


図 7.10: 野宿期間と食事形態

食事形態は収入の額と比較的強く結びついているので、ここ1ヶ月の収入の中央値である2.5万円を基準として「2.5万円未満」「2.5万円以上」の2階層に分け、それぞれで野宿期間と食事形態について見ることにする。紙幅の都合で表は省略して図のみを(図 7.11)(図 7.12)に表した。ここではそれぞれ野宿期間と有意な傾向が見られる食事形態についてのみ表している。

野宿期間の長期化に伴って「自炊」の利用の割合が高くなっていく傾向は比較的収入の高い層でのみ見いだすことができる。野宿期間の長期化に伴って「廃棄食品」「残飯」の利用の割合が高くなっていく傾向は比較的収入の低い層でのみ見いだすことができる。収入の高低に関わらず見いだすことができる傾向は、「食堂・弁当」を利用している割合が野宿期間の長期化に伴って低下している傾向のみである。

これらから野宿期間と食事形態との関係について次のことが言えるであろう。自炊をするには一定の空間の確保や調理器具や食器、調味料などが必要になる。廃棄食品や残飯を手に入れるには様々な知識や情報、工夫が必要である。どこに行けば食べることができる食料を手に入れることができるのか、恒常的に手に入

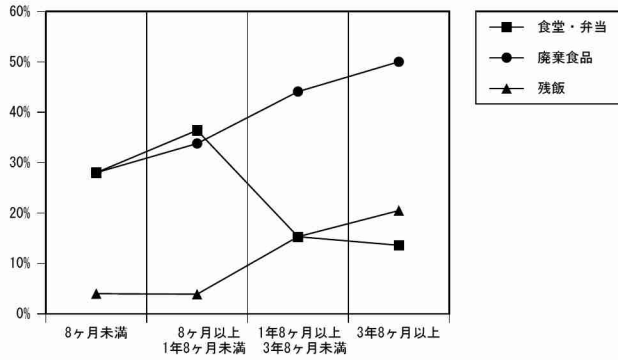


図 7.11: 野宿期間と食事形態 (収入 2.5 万円未満)

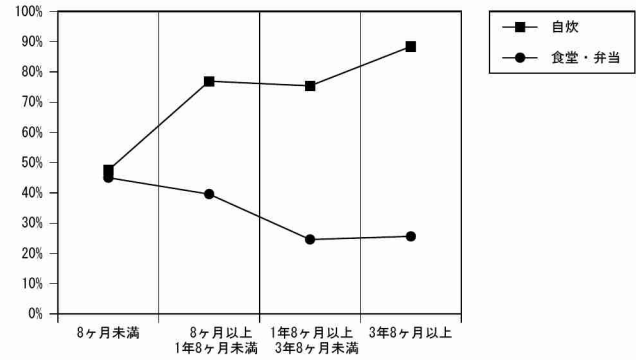


図 7.12: 野宿期間と食事形態 (収入 2.5 万円以上)

れ続けるためにはどのようにしなければならないのか。それら物質的、知識的、関係的諸資源の獲得・蓄積が「自炊」「廃棄食品」「残飯」には必要なのである。野宿期間の長期化はそれら諸資源の獲得・蓄積をもたらし、比較的収入が高い層では「自炊」の割合が、比較的収入の少ない層では「廃棄食品」「残飯」の利用の割合が高くなっているのだと思われる。「食堂・弁当」を利用する割合が野宿期間が比較的短い層で高い傾向は、これら諸資源の蓄積・獲得がなされたいないためであると思われる。比較的収入が少ない層であっても、食料獲得の選択肢が他にはないため、「食堂・残飯」を利用せざるを得ないのであろう。

絶対的にわずかな収入しか得られない野宿生活において、「自炊」「廃棄食品」「残飯」は「食堂・弁当」に比べれば明らかに適的な食事形態であると言える。野宿期間の長期化は食事の確保に必要な物質的、知識的、関係的諸資源の獲得・蓄積をもたらし「自炊」「廃棄食品」「残飯」を利用する割合を高めさせるのである。野宿期間の長期化は＜野宿生活を生きる＞「生活の型」の確立、あるいは野宿生活を生き延びる資源の獲得をもたらすのだと言えることができるだろう。

7.4.4 野宿期間と日用品の調達

度数 行% 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率	P>Chi ²
買う	38 20.0 % 25.7 %	74 38.9 % 33.2 %	51 26.8 % 34.5 %	27 14.2 % 21.6 %	190 100.0 % 29.5 %	8.177 0.0425
粗大ゴミから	82 17.4 % 55.4 %	174 36.9 % 78.0 %	116 24.6 % 78.4 %	100 21.2 % 80.0 %	472 100.0 % 73.3 %	29.547 <.0001
仲間から	23 28.0 % 15.5 %	26 31.7 % 11.7 %	17 20.7 % 11.5 %	16 19.5 % 12.8 %	82 100.0 % 12.7 %	1.441 0.6959
市民・ボランティアから	9 13.4 % 6.1 %	22 32.8 % 9.9 %	20 29.9 % 13.5 %	16 23.9 % 12.8 %	67 100.0 % 10.4 %	5.644 0.1303
その他	48 49.5 % 32.4 %	25 25.8 % 11.2 %	16 16.5 % 10.8 %	8 8.2 % 6.4 %	97 100.0 % 15.1 %	41.978 <.0001
列合計 比率	148 23.0 %	223 34.6 %	148 23.0 %	125 19.4 %	644 100.0 %	

表 7.11: 野宿期間と日用品の調達方法

野宿生活において用いる日用品の調達方法は野宿期間によってどのように異なっているのでしょうか。(表 7.11) は野宿期間と日用品の調達方法との関係を表している。野宿期間との間に有意な傾向が見られる日用品の調達方法は「買う」「粗大ゴミから」「その他」である。(図 7.13) は野宿期間との間に有意な傾向が見られるもののみを表したものである。「その他」は多様な内容を含んでいるのでここでは考察の対象から外す。

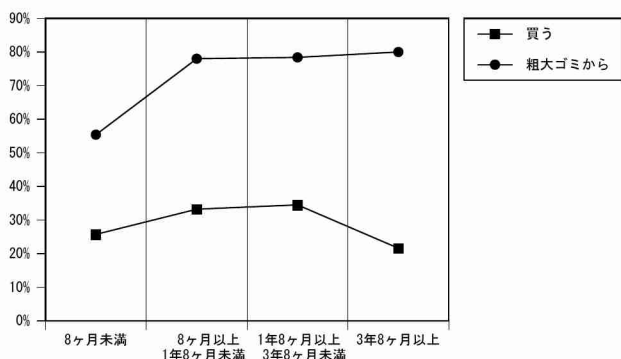


図 7.13: 野宿期間と日用品の調達方法

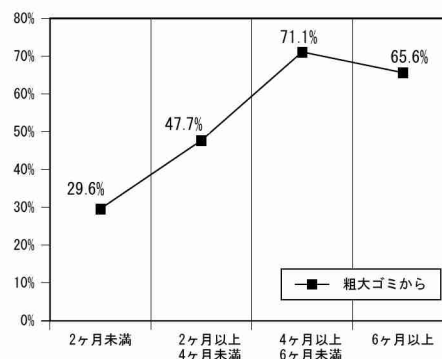


図 7.14: 野宿期間（8ヶ月未満）と日用品の調達方法

「粗大ごみ」から日用品を調達する割合は野宿期間が8ヶ月未満の層に比べ8ヶ月以上の3階層で有意に高くなっている。野宿期間の長期化が「粗大ごみ」から日用品を調達する割合を高めさせるのだと考えられる。この傾向は野宿期間の比較的短い層の野宿期間を細分化して見るとよりはっきりする。(図 7.14) は野宿期間が8ヶ月未満の階層を取り出して階層化した短期野宿期間と日用品調達方法との関係で有意な傾向を示すものだけを載せている。短期野宿層では野宿期間と有意な傾向が見られるのは唯一「粗大ごみから」だけであり、野宿期間の長期化によって「粗大ごみから」の割合が増加している傾向がはっきりと見いだせる。

この傾向は野宿形態の違いに関わらず同様に見いだせる傾向である。テント野宿生活者であれ、非テント野宿生活者であれ、野宿期間の長期化に伴って「粗大ごみから」日用品を調達する割合が増加する傾向を見いだすことができるのである。

野宿期間の長期化が野宿からの退出の可能性が非常に困難であると、あるいは野宿からの退出に長い期間が必要であると知らしめることによって、野宿生活を生き延びるために物的資源を蓄積する必要に迫られることが、最も基底的な要因としてあると考えられる。

絶対的にわずかな収入しか得られない野宿生活において日用品を「買う」という調達方法は野宿生活に適合的な日用品の調達方法であるとは言えない。「粗大ごみから」「仲間から」「市民・ボランティアから」という調達方法の中でも「粗大ごみから」は「仲間から」「市民・ボランティアから」ではなかなか手に入れにくい日用品の調達を可能にするという点で「粗大ごみから」は特に重要な調達方法としてある。しかし、粗大ごみから首尾良く手に入れたい日用品を調達するには情報や知識、工夫が必要である。野宿期間の長期化が「粗大ごみから」日用品を調達する割合を増加させるのは、野宿期間の長期化がそれら情報や知識、工夫の蓄積をもたらすからであると考えられる。「仲間から」「市民・ボランティアから」では見られない野宿期間との有意な傾向が「粗大ごみから」でのみ見いだせるのは、その調達方法が情報や知識、工夫が必要であるからであろう。

日用品を「買う」とする割合は3年8ヶ月未満の3階層に比べて3年8ヶ月以上の層で低くなっている傾向が有意な傾向として見いだせる。しかし残念ながらこの傾向がもたらされた理由はよく分からない。

7.4.5 野宿期間と健康状態

野宿の長期化は、彼らの健康にどのような影響を与えているのか。(表 7.12) は健康状態と野宿期間の関係を表している。(図 7.15) は(表 7.12) から健康状態が悪いとする割合についてのみ表したものである。合わせて野宿形態別の健康状態が悪い割合についても表している。

全体の傾向を見ると、有意性はそれほど高くないものの、体の具合が悪いとする割合は、野宿期間が長期化するにしたがって高くなる傾向を見いだすことができる。しかし、既に「第6章 野宿形態と野宿生活、77ページ」で指摘しているように、テント野宿層では野宿期間と健康状態との間に有意な関係は見られない。野宿期間と健康状態との間で有意な関係が見られるのは非テント野宿生活者においてである。非テント野宿生活者において野宿期間の長期化が健康状態の悪化と結びついている傾向を有意な傾向として見いだすこと

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
体の具合が悪い	47 30.5%	65 28.8%	55 37.2%	52 41.9%	219 33.6%
体の具合は悪くない	107 69.5%	161 71.2%	93 62.8%	72 58.1%	433 66.4%
列合計 比率	154 23.6%	226 34.7%	148 22.7%	124 19.0%	652 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 7.659 0.0536
Pearson 7.732 0.0519

表 7.12: 野宿期間と健康状態

ができるのである。

これまで述べてきた、野宿期間の長期化が＜野宿生活を生きる＞「生活の型」の確立、野宿生活を生き延びるための資源の蓄積をもたらす傾向は、野宿期間の長期化がテント野宿の割合を増加させる傾向とは概ね独立して見られる傾向である。しかし、野宿期間の長期化によって達成される「生活」とは野宿形態によって大きく異なっているのである。

テント野宿とは野宿期間の長期化による肉体的・精神的摩滅をギリギリのところできい止める野宿形態である。テント野宿に比べ、非テント野宿は

肉体的・精神的摩滅によりさらされている。たとえ野宿期間の長期化が＜野宿生活を生きる＞「生活の型」の確立、野宿生活を生き延びるための資源の蓄積をもたらすとしても、非テント野宿においては肉体的・精神的摩滅をくい止めることが可能なギリギリのラインを下回った生活なのである。非テント野宿は健康を悪化させるほど過酷であり、その長期化そのものが健康を悪化させているのである。

野宿期間の長期化に伴う健康状態の悪化は、労働力の磨滅をもたらし、野宿からの退出の可能性は減少し、さらなる野宿の長期化がもたらされる。野宿の長期化がもたらす＜野宿生活を生きる＞「生活の型」の確立、野宿生活を生き延びるための資源の蓄積とは、あくまで野宿生活におけるそれであるに過ぎないことは押さえておかなければならないだろう。

7.4.6 野宿期間と「トラブル」「いやがらせ・暴力」経験

ここでは野宿生活者と「市民」、通行人や地域住民との関わりが野宿期間の長短によって異なっているのか、あるいは異なっていないのかについて見ていく。既に「第 3.5.2 項 野宿生活上のトラブル、38 ページ」で見たように、「市民」から「いやがらせ・暴力」という一方的な攻撃を経験した割合に比べ、「市民」との間でトラブルを経験した割合ははるかに少なく、ここから野宿生活者自身が「トラブル」回避のために実践する努力と抑制を見いだすことができる。しかし、一方的な行為としてある「いやがらせ・暴力」経験より、相互行為としてある「トラブル」が少ないのは当然であると思われるかもしれない。「いやがらせ・暴力」経験、「トラブル」経験の有無に野宿期間という変数を加えることで何が明らかになるだろうか。

(表 7.13) は、野宿期間といやがらせ・暴力経験の有無との関係を表している。(図 7.16) は野宿期間別にいやがらせ・暴力経験があったとする割合とトラブル経験があったとする割合を表している。

「いやがらせ・暴力」経験がある割合は野宿期間が長い層ほど高くなる傾向を見いだすことができる。この野宿期間の長期化に伴って「いやがらせ・暴力」経験を有する割合が増加する傾向は野宿形態、釜ヶ崎就労経験の有無、年齢の違いに関わらず見いだすことができる傾向である。

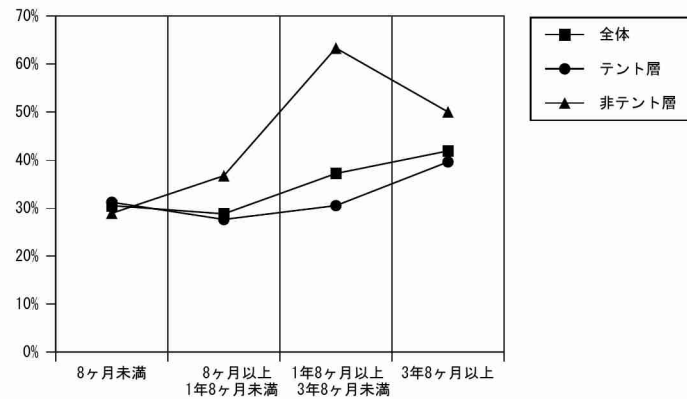


図 7.15: 野宿期間と健康状態が悪い割合

「いやがらせ・暴力」経験、「トラブル」経験の有無は野宿開始から現在に至るまでの期間における経験の有無を尋ねている。従って、野宿期間が1年間から3年間に長期化すれば、「いやがらせ・暴力」を受ける可能性はその他の影響がなければ3倍に増える。野宿期間の長期化が「いやがらせ・暴力」経験を有する割合を増加させる傾向は、野宿期間の長期化が「いやがらせ・暴力」を受ける機会を増加させたことに最も強く影響されていると考えられる。野宿期間の長期化が「いやがらせ・暴力」を避けるための知恵や工夫を「蓄積」させるとしても、それが一方的な攻撃である以上、それを避けるには限界が伴うのである。

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
経験あり	21 13.7%	56 24.8%	50 33.8%	41 33.1%	168 25.8%
経験なし	132 86.3%	170 75.2%	98 66.2%	83 66.9%	483 74.2%
列合計 比率	153 23.5%	226 34.7%	148 22.7%	124 19.0%	651 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 21.308 <.0001
Pearson 20.118 0.0002

表 7.13: 野宿期間といやがらせ・暴力経験

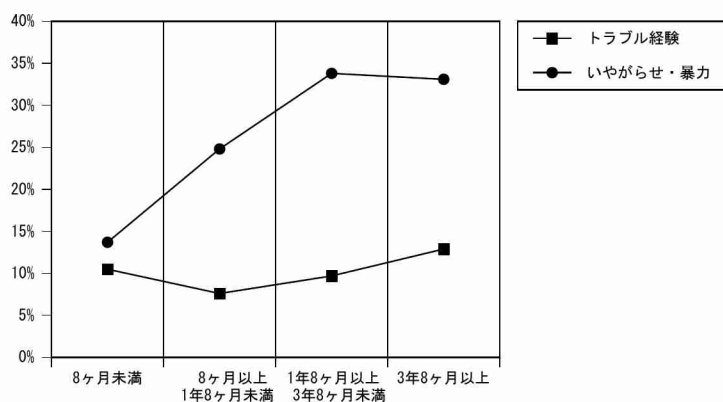


図 7.16: 野宿期間といやがらせ・暴力経験／トラブル経験

「市民」はしばしば野宿生活者を「安全な生活」を脅かす「何をするか分からない、危険な存在」と見なしがちである。しかし、これらを見ていくと、野宿生活者の存在が「市民」にとって脅威であるというよりは、「市民」の存在がむしろ野宿生活者にとって脅威であると言えそうである。「市民」にとって野宿生活者がもたらす脅威とは極めて観念的なものであるのに対して（第 21 章）、野宿生活者にとって「市民」がもたらす脅威とは現実に具体的に加えられる危害なのである。

7.5 野宿期間と「福祉」・サポート資源の利用

7.5.1 行政窓口への相談

度数 列	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
相談経験あり	22 14.4%	51 22.6%	37 25.2%	30 24.2%	140 21.5%
相談経験なし	131 85.6%	175 77.4%	110 74.8%	94 75.8%	510 78.5%
列合計 比率	153 23.5%	226 34.8%	147 22.6%	124 19.1%	650 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 6.846 0.077
Pearson 6.446 0.0918

表 7.14: 野宿期間と行政窓口への相談

「トラブル」経験を有する割合が単に相互行為か一方的行為かの違いによって「いやがらせ・暴力」経験を有する割合より低いのであれば、「トラブル」経験を有する割合は「いやがらせ・暴力」経験と同様に野宿期間が長期である層ほど高くなることが予想される。しかし、「トラブル」経験の有無と野宿期間の間に有為な関係は見られない。野宿期間の長期化は「いやがらせ・暴力」経験と同様に「トラブル」が生じる機会を増加させるにも関わらず、「トラブル」経験を有する割合を増加させはしないのである。ここから、明らかに野宿生活者は「トラブル」を回避することを志向し、実践している様子を見いだすことができる。「トラブル」経験を有する割合の低さは、その志向と実践の結果である。

野宿期間と行政窓口の利用の有無との間に何らの関係が見いだせるであろうか。(表 7.14) (図 7.17) は行政窓口への相談と野宿期間の関係を表している。

これらからは、統計的な有意性は高くないものの、野宿期間が8ヶ月未満の層に比べ、8ヶ月以上の3階層で若干ながら行政窓口への相談経験のある割合が高くなっている傾向が見られる。行政窓口への相談の有無とは、野宿を始めてから現在におけるまでの、過去の経験を尋ねている設問であるので、このわずかな増加は野宿期間の長期である者ほど行政的「資源」を利用しようとする傾向を示しているのではない。8ヶ月以上の3階層では行政窓口利用の割合には全く有意な差は見いだせないことを考えれば、ここから見いだすべきは恐らくそれとは逆の傾向であろう。すなわち、野宿期間が長期である者ほど行政的「資源」を利用しなくなるという傾向である。

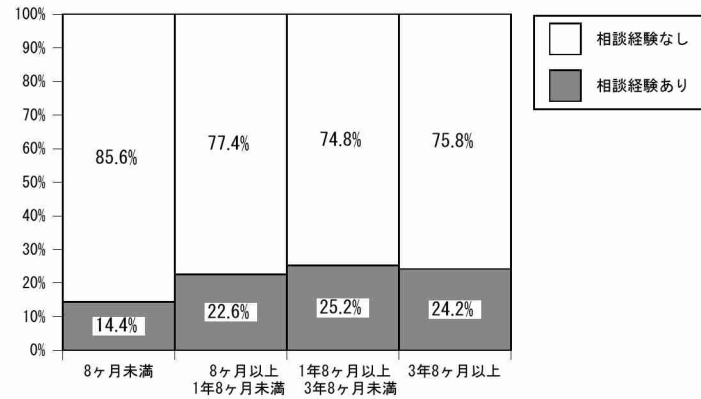


図 7.17: 野宿期間と行政窓口への相談

野宿生活者は野宿期間が比較的短期である間に行政窓口を利用することで野宿からの退出現を現実させようと、あるいは野宿生活を生き延びるために利用しようとするのではないか。しかし、そこで行政窓口がそれらの実現にとって有用な資源とはならないことを知ったために、それ以降は利用することはないのではないだろうか。行政窓口利用の割合が8ヶ月未満の層に比べ8ヶ月以上1年8ヶ月未満の層で高くなっているのは、野宿期間の長期化によって単にその機会が増加したことに規定されていると思われる。

調査協力者は野宿生活からの退出現を現実できなかった者であるから、行政窓口が野宿生活からの退出現に成功するために有用な「資源」となっているか否かは判断できない。しかし、少なくとも野宿生活者にとって行政窓口が有用な「資源」と見なされてはいないことは確かであろう。そしてそれは行政窓口への利用の経験に基づいているのではないと思われるのである。

7.5.2 野宿期間と白手帳所持

「白手帳」は釜ヶ崎の日雇労働者にとって、その生活をサポートする重要な「資源」の1つである。「第 3.8.8 項 白手帳の所持状況、51 ページ」で既に述べられているように、推計された釜ヶ崎の日雇労働者全体における白手帳所持率約 50%に対して、今回の調査協力者で釜ヶ崎就労経験を有している者の白手帳所持率 21.6%に過ぎない。「第 3.8.8 項 白手帳の所持状況、51 ページ」では釜ヶ崎（あいりん地域）の日雇労働者の中でも白手帳を所持していない者においては、より野宿へ至る距離が短いのではないかと示唆がなされている。白手帳所持に野宿期間という変数を加えることで何が明らかになるだろうか。

度数 列	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
所持	23 33.3%	38 28.1%	23 22.3%	7 10.0%	91 24.1%
作っていない	30 43.5%	67 49.6%	46 44.7%	36 51.4%	179 47.5%
放棄・紛失	16 23.2%	30 22.2%	34 33.0%	27 38.6%	107 28.4%
列合計 比率	69 18.3%	135 35.8%	103 27.3%	70 18.6%	377 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 17.069 0.009
Pearson 15.817 0.0148

表 7.15: 野宿期間と白手帳所持

(表 7.15) (図 7.18) は野宿期間と白手帳所持状況との関係を表している。白手帳所持状況は現在も所持している「所持」、そもそも作っていない「作っていない」、そしてかつて所持していたが何らかの理由で放棄、もしくは紛失した「放棄・紛失」の3カテゴリーに区分した。

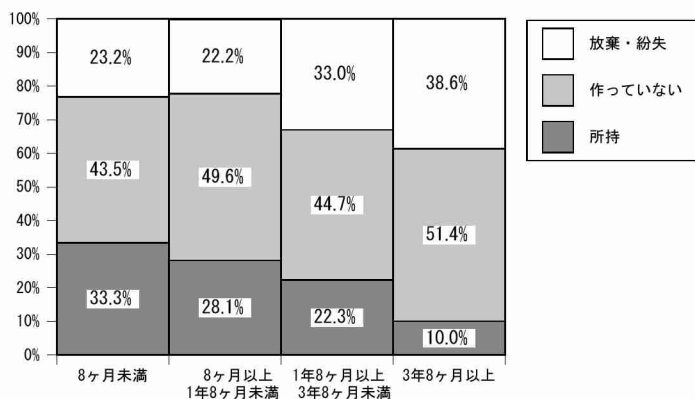


図 7.18: 野宿期間と白手帳所持

野宿期間の長期化に伴って「所持」の割合は減少し、「放棄・紛失」の割合が増加している傾向を見いだすことができる。「作っていない」割合は野宿期間の長短（ここでは野宿開始時期の違いと言った方がよいが）との間に有意な傾向を見いだすことはできない。白手帳の「放棄・紛失」がどの時期になされたのかについてのデータは今のところ残念ながらない。野宿に至る以前に「放棄・紛失」があったのか、あるいは野宿生活の中であったのかは分からないのである。

「紛失・放棄」が野宿に至る以前にあったのなら、ここに示される傾向から、白手帳不所持が野宿へ至る可能性を高めさせ、白手帳不所持層がより早い時期に野宿に至ったのだとする解釈も可能である。しかし、その少なくない部分が野宿生活の中においてなされたのは確かである。「放棄・紛失」が野宿生活の中で生じたことに注目するなら、ここに示される傾向から、低い白手帳所持率は野宿期間の長期化の結果であると言える。

白手帳は日雇労働者として一定の日数の就労を条件として有用な「資源」たり得る。野宿生活から釜ヶ崎への帰還が不可能であると見なさざるを得ない状況になった時、白手帳はもはや所持する意味を持たない。確かに「ソーメン代」や「モチ代」といった一時給付金は、白手帳を所持していれば就労日数といった条件とは無関係に受給することができる。それでもやはり白手帳の重要度は釜ヶ崎への帰還の可能性を低く見積もらざるを得ない状況では低下する。

白手帳を所持する割合の低さは、野宿に至る距離を縮める要因としてあると共に、野宿期間の長期化による釜ヶ崎への帰還をあきらめざるを得ない状況の結果としてあるのである。

7.6 野宿期間と行政施策利用希望

7.6.1 野宿期間と自立支援センター利用希望

「第 3.9.3 項 自立支援センター、54 ページ」で述べたように、自立支援センターの利用を希望する割合は全体の約半数である 53.1% であった。自立支援センターの利用希望の有無に野宿期間という変数を加えることで何が明らかになるだろうか。

度数列	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月以上	行合計 比率
利用を希望する	92 61.3%	138 62.4%	66 46.2%	46 37.4%	342 53.7%
利用を希望しない	58 38.7%	83 37.6%	77 53.8%	77 62.6%	295 46.3%
列合計	150	221	143	123	637
比率	23.5%	34.7%	22.4%	19.3%	100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 26.881 <.0001
Pearson 26.731 <.0001

表 7.16: 野宿期間と自立支援センターの利用希望

(表 7.16) (図 7.19) は野宿期間と自立支援センターの利用希望の関係を表している。自立支援センターの利用を希望する割合は、野宿期間が短期であるほど高い割合を示しており、長期化するほど減少している。

この傾向はどのように解釈できるだろうか。

これまで行政が野宿からの退出現を実現するための施策を積極的に展開したことが無かったことを考えるならば、行政施策の利用を希望しないことが野宿期間の長期化をもたらしたとは考えにくい。

では、自立支援センターの利用希望が野宿からの退出現意欲を表していると考えられるだろうか。「社会生活を拒否する」が故に、あるいは野宿生活を志向する「独特の人生観」を持っているが故に野宿生活を営む者は野宿からの退出現を実現するために用意される施策を利用しようとはしないだろう。野宿期間と自立支援センターの利用

希望との間に示された傾向は、自立支援センターの利用希望に表現される退出現意欲の低い者ほど野宿期間が長期化しがちであるということを示しているのだろうか。しかし、当然ながら自立支援センターの利用希望の有無を野宿からの退出現意欲と同一視することはできない。自立支援センターが野宿からの退出現にどれだけ有用であるかについての評価は、各野宿生活者ごとに様々であるからである。その設置が実現されたとしても、それが野宿からの退出現を実現するだけの内実を持たないだろうと考えているならば、その利用を希望することはないだろう。野宿期間の長短にかかわらず野宿からの退出現への願いが一定であっても、それが野宿生活からの退出現にどの程度有用かについての見積り等によって利用を希望するか否かは大きく影響されるのである。

野宿期間の長期化が自立支援センターの利用を希望する割合の減少をもたらしたと考える方が妥当であろう。そうであるならば、野宿期間の長期化が自立支援センターの利用を希望する割合の減少をもたらした要因として次のような要因が考えられる。

自立支援センターは「就労による自立」を目的とした施策である。「第7.4節 野宿期間と転職希望、108ページ」で述べたように、新たな仕事に就くことができなかった故に長期間の野宿生活を強いられてきた野宿生活者は、新たな仕事に就くことが非常に困難であることを知っている。野宿期間の長期化は自立支援センターがその「出口」である就労先を本当に提供できるのかに対する疑問を増大させる。さらに、野宿期間の長期化は加齢を伴うし、肉体の摩滅をもたらしがちである。また、労働市場からの排除は野宿生活者に自らの労働力を「無価値」なものとして内面化させる圧力となる。野宿期間の長期化は現役労働者としての自己意識の低減を強いるのである。そして、野宿期間の長期化は自立支援センターという特定の施策に対してではなく、行政そのものに対する評価を低減させている。行政は野宿生活者からの信頼を失っているのだ。長期間の野宿生活を強いられた者ではより強い「不信」を行政に対して抱いていると思われる。

野宿期間の長期化は「就労による自立」に対して、「この不景気で仕事があるのか」「自立支援センターはそれを用意できるのか」といった（外在的）要因に対する疑問、「自分が就くことができる仕事はあるのか」といった疑問を増大させる。そして長期間に渡る野宿生活は、それら自立支援センターの有用性に対する疑問を増大させる行政施策、行政全般に対する「不信感」を醸成する。このような要因によって野宿期間の長期化は自立支援センターの利用希望の割合を減少させていくのだと考えられる。

自立支援センターが野宿からの退出現のための有用な資源となることを事実として示すことができれば、自立支援センターに対する評価、すなわち利用を希望する割合も大きく変わるであろう。また、行政施策に乗ろうとしない野宿生活者を安易に「社会生活を拒否する者」として排除と隔離の対象として処遇すべきでないことは言うまでもない。長期間に渡って野宿生活を強いてきたことが、「社会生活を拒否する」行政によって定義される状況を生み出した要因として考えられる以上、慎重な対応は行政が当然果たすべき役割である。

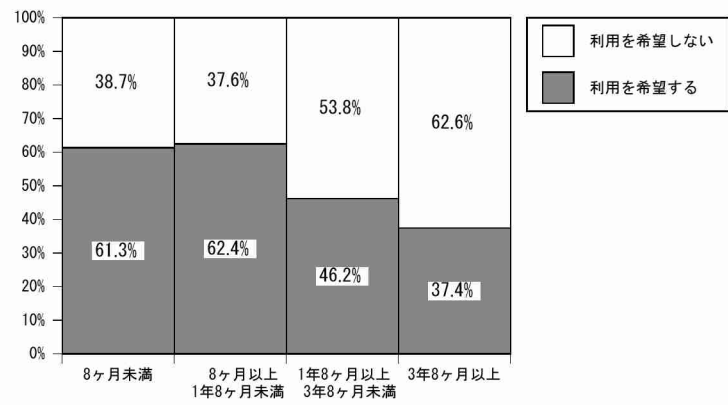


図 7.19: 野宿期間と自立支援センターの利用希望

7.6.2 野宿期間と生活ケアセンター利用希望

生活ケアセンターは2週間を限度とする短期の宿泊サービスを提供する施設である。生活ケアセンターは野宿生活者にとってその生命と生活を維持するためのサポート資源となりえる。生活ケアセンターの利用希望は野宿期間とどのような関係にあるのだろうか。

度数 列%	8ヶ月未満	8ヶ月以上 1年8ヶ月未満	1年8ヶ月以上 3年8ヶ月未満	3年8ヶ月 以上	行合計 比率
利用を希望する	72 47.7%	98 43.9%	49 33.3%	36 29.3%	255 39.6%
利用を希望しない	79 52.3%	125 56.1%	98 66.7%	87 70.7%	389 60.4%
列合計 比率	151 23.4%	223 34.6%	147 22.8%	123 19.1%	644 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 13.963 0.003
Pearson 13.788 0.0032

表 7.17: 野宿期間と生活ケアセンター利用希望

(表 7.17) (図 7.20) は野宿期間と生活ケアセンター利用希望の関係を表している。ここから、野宿期間が長期である層ほど、生活ケアセンターの利用を希望する割合は減少している傾向を有意な傾向として見いだすことができる。

野宿期間の長期化の結果として生活ケアセンターの利用を希望する割合が減少しているのだと考えられる。野宿期間の長期化が生活ケアセンターの利用を希望する割合を減少させる要因として以下のようなものが考えられる。

1 つには自立支援センターの利用希望について述べたものと同様に、野宿期間の長期化の過程で蓄積された行政そのものに対する否定的感情を挙げられるだろう。

もう 1 つには生活ケアセンターの利用によって得られる便益が野宿期間の長期化によって減少するという要因である。これまで述べてきたように野宿期間の長期化は < 野宿生活を生きる > 「生活の型」、野宿生活を生き延びるための資源の「蓄積」をもたらす。野宿生活の場所から離れなければならないことは、所有物の保管、飼っている猫や犬の世話といった問題を生じさせる。生活ケアセンターが野宿からの退去を展望できる施策ではないため、一時的にしる「テント」を放棄するといった「コスト」はより深刻なものとして現れるだろう。また、自らの過去の利用経験や野宿生活者間の「噂」に基づく宿泊施設に対する否定的イメージは利用する際に「コスト」として考慮されるだろう。野宿期間の長期化は生活ケアセンターの利用によって得られる便益を減少させ、支払わなければならない「コスト」を増大させるのである。

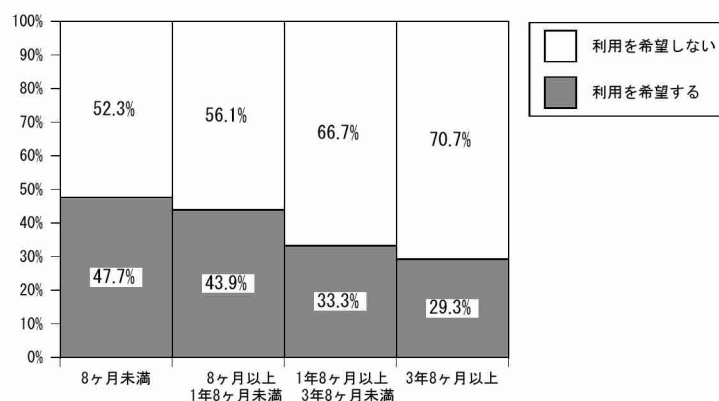


図 7.20: 野宿期間と生活ケアセンター利用希望

7.7 小括

本章では、「野宿期間」変数を野宿開始時期、野宿期間を表す基準変数とし、野宿開始時期と「属性」との関係、野宿期間と野宿生活の実態やニーズの関係について述べてきた。そこで、野宿開始時期の差による属性の変化、野宿期間の長期化が「生活」実態、ニーズにもたらす影響が明らかにされた。

まず、野宿開始時期と「属性」との関係を見てみる。

野宿期間が長期であるほど年齢分布は高齢である傾向が見られるが、それは野宿期間の長期化による加齢

の結果でしかない。野宿開始時期と野宿開始時点での年齢との関係を見ると、近年、若年層が野宿に至っているという傾向は見いだせないのである。

次に野宿期間と野宿生活との関係について見てみる。

野宿生活からの退出の一戦略として、一定の収入を得られる職を得ることが考えられる。

野宿期間の長期化に伴って、「転職」を希望する割合、求職活動をしている割合は減少していく。この傾向は「転職」を希望しない、求職活動を行わない「怠け者」野宿生活者の野宿期間は長期化しがちであることを表しているのではなく、長期化の結果としてあるのだと考えられる。野宿生活からの退出を可能とするような仕事に就くことができなかつた期間の長期化は、就労による野宿からの退出を実現可能であると考え、これを困難にする。就労による野宿からの退出を諦めざるを得なくなる過程として野宿期間の長期化の過程があるのだと考えられる。釜ヶ崎で就労経験のある層にとって、就労による野宿から退出するための第一の「出口」は日雇労働市場としての釜ヶ崎である。釜ヶ崎就労経験を有する層と日雇労働市場としての釜ヶ崎との関係からも、求職活動全体の傾向同様の傾向を見いだすことができる。釜ヶ崎で求職している割合、今後も釜ヶ崎で求職しようと考えている割合は、全体としては野宿期間の長期化に伴って減少しているのである。

野宿期間の長期化は、就労による野宿からの退出の可能性についての想定を悲観的なものへと変化させる。同時に野宿期間の長期化は「一定の型」をもった野宿生活が確立されていく、野宿生活を生き延びるための「資源」が蓄積されていく過程でもあるのである。

野宿の長期化はテント野宿の割合を高めさせる。それは野宿生活における基盤の形成である。また日常生活品を粗大ごみから調達する割合も長期化に伴って増加する。野宿の長期化はまた、野宿生活における仕事—その中心をしめるのは廃品回収である—を有する割合を高めさせる。野宿生活における「安定した」収入源の獲得である。これらは比較的「短期間」の内に生じる。

野宿期間の長期化に伴って食事形態にも変化が生じる。食料を購入する割合は減少し、比較的収入の「高い」層では自炊の割合が、収入の低い層では廃棄食品、残飯の増加していく。

野宿期間の長期化は、野宿生活を維持・安定化させるために利用可能な知的、経験的、物質的諸資源の「蓄積」をもたらす、野宿は「一定の型」をもった野宿生活として確立されていくのである。

野宿生活が確立されたとしても、それが非常に過酷な生活であることに違いはない。野宿期間が長期化するにつれて、非テント層においては健康状態が悪いとする割合は上昇し、いやがらせや暴力を受ける経験も増加するのである。

では、自立支援センターや生活ケアセンターの利用希望は、野宿期間とどのように影響されるであろうか。

自立支援センター、生活ケアセンターいずれの利用希望も野宿期間の長期化に伴って減少している。この関係は長期間に渡る野宿生活の結果として理解されるべきであろう。長期間野宿生活を強いられてきた結果として蓄積された行政に対する「不信」がこの傾向をもたらす要因の1つとしてあるだろう。生活ケアセンター利用希望の割合が野宿期間の長期化に伴って減少していく傾向は、野宿期間の長期化によってもたらされた<野宿生活を生きる>「生活の型」の確立、野宿生活を生き延びるための「資源」の「蓄積」によって、その利用によって得られる便益が減少し、逆にコストが上昇することによってもたらされたのだと考えられる。自立支援センター利用希望の割合が野宿期間の長期化に伴って減少していく傾向は、野宿期間の長期化によつて就労による野宿からの退出を想定することが困難になっていくことによつてもたらされたのだと考えられる。これまで野宿からの退出を実現できなかった者が、例え野宿からの退出を目指してなされる行政施策であるとしても、その効果を鵜呑みにはしないだろう。

第 8 章

仕事・生活変数からみた野宿生活

8.1 はじめに

本章では、まず、仕事の有無（「有職」層と「無職」層）で分類することにより、仕事の有無が野宿生活のどこまで影響をあたえているか考察していきたい。そして、「仕事」変数を用いた仕事の面からだけでなく、「生活」変数を用いることにより、野宿生活者を大別し、健康面、経歴面（釜ヶ崎経験、建設業経験、野宿期間等）、生活面（食事、嗜好品、日用生活品等）といった野宿生活全般にわたる項目においてそれぞれの層にはどのような傾向を見ることができるのかを順に提示していきたい。

8.2 仕事変数による分析

8.2.1 仕事変数と釜ヶ崎変数

度数 列%	「有職」層	「無職」層	行合計 比率
「釜ヶ崎往還」層	164 30.9 %	25 19.4 %	189 28.7 %
「釜ヶ崎離脱」層	180 34.0 %	20 15.5 %	200 30.3 %
「非釜ヶ崎」層	186 35.1 %	84 65.1 %	270 41.0 %
列合計 比率	530 80.4 %	129 19.6 %	659 100.0 %

Test	ChiSquare	Prob>ChiSq
Likelihood Ratio	39.186	<.0001
Pearson	39.308	<.0001

表 8.1: 「仕事」変数と釜ヶ崎変数

度数 列%	「有職」層	「無職」層	行合計 比率
「釜ヶ崎往還」層	162 30.7 %	24 18.9 %	186 28.4 %
「釜ヶ崎離脱」層	179 34.0 %	19 15.0 %	198 30.3 %
「非釜ヶ崎 ・建設」層	114 21.6 %	44 34.6 %	158 24.2 %
「非釜ヶ崎 ・非建設」層	72 13.7 %	40 31.5 %	112 17.1 %
列合計 比率	527 80.6 %	127 19.4 %	654 100.0 %

Test	ChiSquare	Prob>ChiSq
Likelihood Ratio	42.709	<.0001
Pearson	43.436	<.0001

表 8.2: 「仕事」変数と釜ヶ崎・建設変数

「仕事」変数とその他の変数について「仕事」変数と釜ヶ崎変数、釜ヶ崎・建設変数との関係を明確にしておく（表 8.1、8.2）。分析すると、「非釜ヶ崎」層には「有職」層の割合（35.1%）より「無職」層の割合（65.1%）が著しく高い。さらに詳しく、釜ヶ崎・建設変数との関係をみると、「釜ヶ崎往還」層は、「有職」層での割合（30.7%）が「無職」層の割合（18.9%）より大きい。「釜ヶ崎離脱」層については、「有職」層の割合（34.0%）より「無職」層の割合（15.0%）が高い。「非釜ヶ崎・建設」層については「無職」層の割合（34.6%）が「有職」層の割合（21.6%）より高い。「非釜ヶ崎・非建設」層については「無職」層での割合（31.5%）が「有職」層の割合（13.7%）より高い。以上より、「有職」層は「釜ヶ崎」層の割合が高く、「無職」層は「非釜ヶ崎」層の割合が高い。仕事をしているかどうかで「仕事」変数を作ったが、この変数は「釜ヶ崎」か「非釜ヶ崎」と同義であるということが分かった。

8.2.2 仕事変数と年齢

年齢と仕事変数とのクロス表をみると(表 8.3)、「55 歳以上 65 歳未満」では「有職」層(45.6%)での割合が「無職」層の割合(36.6%)に比べて高い。「65 歳以上」では、「無職」層の割合(20.6%)が「有職」層の割合(10.7%)より高い。これより、「無職」層は「有職」層より高齢者の割合が高いと考えられる。さらに「有職」層、「無職」層について求職活動をしているかどうかみていくことにより、各層にどのような年齢層が混在しているかみると(表 8.4)、各層、「求職活動あり」層は、「求職活動なし」層と比較して年齢が若干低いことがわかる。また、「65 歳以上」では「無職・求職活動なし」層で割合が著しく高くなっている。

度数 列%	有職	無職	行合計 比率
45 歳未満	47 8.8 %	8 6.1 %	55 8.3 %
45 歳以上 55 歳未満	186 34.9 %	48 36.6 %	234 35.2 %
55 歳以上 65 歳未満	243 45.6 %	48 36.6 %	291 43.8 %
65 歳以上	57 10.7 %	27 20.6 %	84 12.7 %
列合計 比率	533 80.3 %	131 19.7 %	664 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 10.309 0.0161
Pearson 11.12 0.0111

度数 列%	有職・求職 活動あり	有職・求職 活動なし	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
45 歳未満	27 10.6 %	20 7.2 %	4 7.5 %	4 5.3 %	55 8.3 %
45 歳以上 55 歳未満	103 40.6 %	83 29.9 %	18 34.0 %	28 37.3 %	232 35.2 %
55 歳以上 65 歳未満	109 42.9 %	133 47.8 %	25 47.2 %	22 29.3 %	289 43.8 %
65 歳以上	15 5.9 %	42 15.1 %	6 11.3 %	21 28.0 %	84 12.7 %
列合計 比率	254 38.5 %	278 42.1 %	53 8.0 %	75 11.4 %	660 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 35.692 <.0001
Pearson 36.495 <.0001

表 8.3: 年齢と「仕事」変数

表 8.4: 年齢と仕事・求職活層の有無

8.2.3 健康状態と仕事変数

年齢と「仕事」変数には関係があるということがわかった。では、年齢と関係すると思われる健康状態について「仕事」変数との関係性をみると(表 8.5)、「仕事」変数と健康状態で関係性はみられなかった。つまり、健康状態がどのような状態でも、仕事をせざるを得ない状況にあるということが出来る。

度数 列%	有職	無職	行合計 比率
具合が悪くない	357 67.1 %	82 61.2 %	439 65.9 %
具合が悪い	175 32.9 %	52 38.8 %	227 34.1 %
列合計 比率	532 79.9 %	134 20.1 %	666 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 1.64 0.2003
Pearson 1.665 0.197

表 8.5: 健康状態と「仕事」変数

8.2.4 野宿期間と仕事変数

次に、野宿期間と仕事変数についてみていく(表 8.6、8.7)。全野宿期間 8 ヶ月未満では、「無職」層が 38.9%であるのに対し「有職」層は 20.0%と少ない。なぜ、「8 ヶ月未満」で「無職」層は「有職」層と比べて、割合が大きいかと考えたところ、以下の原因が考えられる。それは求職活動中(仕事まち)層がいるため、言い換えるなら、野宿期間が 8 ヶ月以上になると求職活動意欲が減退し、生きていくための手段として「廃品回収」に従事してしまうためと推測される。そこで、野宿期間と仕事・求職活動の関係性をみると、「8 ヶ月未満」層では「無職・求職活動あり」層の割合が非常に高い。よって、「無職」層、には「仕事待ち」層が含

まれているということが分かった。

度数 列%	有職	無職	行合計 比率
8ヶ月未満	106 20.0%	49 38.9%	155 23.6%
8ヶ月以上	196 36.9%	32 25.4%	228 34.7%
1年8ヶ月未満	128 24.1%	21 16.7%	149 22.7%
1年8ヶ月以上	101 19.0%	24 19.0%	125 19.0%
3年8ヶ月未満	531 80.8%	126 19.2%	657 100.0%
3年8ヶ月以上			
列合計 比率			

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 20.445 0.0001
Pearson 21.838 <.0001

表 8.6: 野宿期間と「仕事」変数

度数 列%	有職・求職 活動あり	有職・求職 活動なし	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
8ヶ月未満	65 25.8%	41 14.7%	25 50.0%	23 31.5%	154 23.6%
8ヶ月以上	106 42.1%	90 32.4%	15 30.0%	16 21.9%	227 34.8%
1年8ヶ月未満	56 22.2%	72 25.9%	7 14.0%	13 17.8%	148 22.7%
1年8ヶ月以上	25 9.9%	75 27.0%	3 6.0%	21 28.8%	124 19.0%
3年8ヶ月未満	252 38.6%	278 42.6%	50 7.7%	73 11.2%	653 100.0%
3年8ヶ月以上					
列合計 比率					

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 67.206 <.0001
Pearson 66.67 <.0001

表 8.7: 野宿期間と仕事・求職活動

8.2.5 居住形態と仕事変数

テントで暮らしているかどうかは、仕事の有無と大いに関係している（表 8.8）。「無職」層では、「テント」層の割合は 56.7%と少なく「有職」層では、「テント」層の割合は 84.7%にも上る。ではなぜ、「有職」層に「テント」層が多いのであろうか。一つの原因として、「有職」層は「無職」層と比べて長期野宿が多いことから、テント生活を始めるのは、野宿生活が長期にわたらざるを得ないことへの「覚悟」を持つに至ったからだと考えられる。また、もう一つの原因としては、テント生活を始めてから廃品回収をするのか、廃品回収をするためにテントを張るかはさだかではないが、「有職」層の「仕事」が廃品回収であることを考えれば「テント」層が多くても当然の結果であると思われる。

度数 列%	「有職」層	「無職」層	行合計 比率
テント	455 84.7%	76 56.7%	531 79.1%
非テント	82 15.3%	58 43.3%	140 20.9%
列合計 比率	537 80.0%	134 20.0%	671 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 44.983 <.0001
Pearson 50.97 <.0001

表 8.8: テント生活と「仕事」変数

8.2.6 食事と仕事変数

次に、生活実態の中の食事についてみていく（表 8.9）。

「自炊」について見ると、「有職」層は「無職」層と比べてかなり多い。この理由としては3つあげることができると思う。「自炊」するにはそれなりの自炊できる環境が必要であると考えられる。そして、「自炊」するのに必要な道具の調達には廃品回収の仕事をしているかどうかで確保の機会が大きく異なるし、食料の調達にはわずかでも現金収入があることが有利であるなどの理由が考えられる。また、コンビニなどの「廃棄弁当」の利用（廃棄食品）も「無職」層で多くなっている。以上より、「無職」層はあまり自炊をせず、廃棄食品を利用して食事を維持しているという厳しい野宿生活の一面がうかがえる。

8.2.7 野宿者間のつきあいと仕事変数

野宿者間の仲間とのつきあいは、つきあい「あり」と回答している割合について見ると、「有職」層の方が（81.3%）が「無職」層（73.9%）より高い（表 8.10）。なぜ「有職」層に多いかと考えると、「有職」層は「無職」層と比べて定位置で生活しているテント生活者が多いため、また、「有職」層の大多数が従事している仕事が「廃品回収」ということを考えると共同で回収品を集めて生活していく関係が成り立っている可能性もある。そこで、（表 8.11）を見ると、「仕事上」のつきあいがあると回答している者の割合が「有職」層で高い。よって、「有職」層と「無職」層での野宿者間の付き合いの差異は、仕事を介しての付き合いがある

かどうかの差異であると言える。

度数 行% 列%	有職	無職	行合計 比率
炊き出し	42 72.4 % 7.8 %	16 27.6 % 12.2 %	58 100.0 % 8.7 %
自炊	352 88.4 % 65.5 %	46 11.6 % 35.1 %	398 100.0 % 59.6 %
食堂・ 弁当	160 83.3 % 29.8 %	32 16.7 % 24.4 %	192 100.0 % 28.7 %
廃棄食品	162 76.4 % 30.2 %	50 23.6 % 38.2 %	212 100.0 % 31.7 %
残飯	39 73.6 % 7.3 %	14 26.4 % 10.7 %	53 100.0 % 7.9 %
仲間から	96 76.2 % 17.9 %	30 23.8 % 22.9 %	126 100.0 % 18.9 %
その他	53 70.7 % 9.9 %	22 29.3 % 16.8 %	75 100.0 % 11.2 %
列合計 比率	537 80.4 %	131 19.6 %	668 100.0 %

表 8.9: 食事と仕事

度数 列%	有職	無職	行合計 比率
つきあい あり	435 81.3 %	99 73.9 %	534 79.8 %
つきあい なし	100 18.7 %	35 26.1 %	135 20.2 %
列合計 比率	535 80.0 %	134 20.0 %	669 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 3.499 0.0614
Pearson 3.671 0.0554

表 8.10: 野宿者間のつきあいと仕事変数

度数 行% 列%	有職	無職	行合計 比率
仕事上	99 97.1 % 23.0 %	3 2.9 % 3.0 %	102 100.0 % 19.3 %
生活上	254 80.9 % 59.1 %	60 19.1 % 60.6 %	314 100.0 % 59.4 %
余暇・ 娯楽	200 82.6 % 46.5 %	42 17.4 % 42.4 %	242 100.0 % 45.7 %
あいさ つ程度	59 81.9 % 13.7 %	13 18.1 % 13.1 %	72 100.0 % 13.6 %
その他	46 85.2 % 10.7 %	8 14.8 % 8.1 %	54 100.0 % 10.2 %
列合計 比率	430 81.3 %	99 18.7 %	529 100.0 %

表 8.11: 野宿者間のつきあいの内容と仕事変数

8.3 生活変数による分析

8.3.1 年齢と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
45 歳未満	17 7.0 %	13 8.0 %	6 8.7 %	4 7.5 %	4 5.3 %	44 7.3 %
45 歳以上 55 歳未満	74 30.5 %	63 38.9 %	25 36.2 %	18 34.0 %	28 37.3 %	208 34.6 %
55 歳以上 65 歳未満	116 47.7 %	72 44.4 %	35 50.7 %	25 47.2 %	22 29.3 %	270 44.9 %
65 歳未満	36 14.8 %	14 8.6 %	3 4.3 %	6 11.3 %	21 28.0 %	80 13.3 %
列合計 比率	243 40.4 %	162 26.9 %	69 11.5 %	53 8.8 %	75 12.5 %	602 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 27.127 0.0074
Pearson 27.681 0.0062

表 8.12: 年齢と「生活」変数

先の節では仕事変数を用いて野宿生活についてみてきたが、仕事の面からだけでは不十分なので、以下生活変数を用いてさらに詳しく見ていくことにする。

年齢と生活変数のクロス表をみると(表 8.12)、「45 歳未満」、「45 歳以上 55 歳未満」では生活変数のどの層にも大差はないが、「55 歳以上 65 歳未満」では、「無職・求職活動なし」層の割合が低く、「65 歳以上」では「廃

品回収以外従事」層が低く、「無職・求職活動なし」層が高い。

次に「廃品回収」だけで比較すると、「45歳以上 55歳未満」の割合は「月収3万円以上」層が「月収3万円未満」層より高い。逆に、「55歳以上 65歳未満」では「月収3万円未満」層が「月収3万円以上」層より高い。これは「廃品回収」での収入は、身体（体力）に依存する部分が大いいためと考える。収入を増やすためにはアルミ缶をたくさん回収しなければならないが、たくさん回収するためには体力を必要とする。また、単価の高い粗大ごみを回収しようと思えば、それだけ重い物を運ぶだけの体力を必要とする。つまり、廃品回収の収入は体力＝年齢に依存しているといえることができる。

次に「無職」層だけで比較すると、65歳未満の割合が高いのは「求職活動あり」で、65歳以上の割合が高いのは「求職活動なし」となっている。つまり65歳を境界とし求職活動意欲の減退をみることが出来る。なぜ65歳をさかいとするかは、65歳になれば福祉を受けることができると釜ヶ崎では一般的に言われているため、また65歳が仕事をする体力の限界であることなどと考えられるが推測に過ぎない。

以上、年齢と生活変数の関係をまとめると、「廃品回収」層内では「月収3万円未満」層に高齢の割合が高く、「無職」層では「求職活動なし」層の方が高齢の割合が高くなる、つまり、年齢が高齢化するにつれ、体力が衰え収入が減少し求職活動意欲が低下していく傾向にあるといえることができる。

8.3.2 健康、病気・けがと生活変数

次に年齢、体力と関係すると思われる、健康状態、病気・ケガについてみていくことにする。

生活変数と健康状態のクロス表をみると（表 8.13、8.14）、健康状態が「悪い」と回答した割合が「無職・求職活動なし」層で若干ではあるが高くなっているが、他の層では大差はみられない。なぜ「無職・求職活動なし」層で、健康状態「悪い」と回答している割合が高くなったか考えると、先述した年齢、つまり65歳以上の人が多いためと考えられる。

以上をまとめると、健康状態、病気・ケガと生活変数は関係があるとはいえない。

年齢と生活変数との関係で「廃品回収」層の中では「月収3万円未満」層で高齢の割合が高く、「無職」層の中では「求職活動なし」層で高齢の割合が高いと述べたが、健康状態、病気・ケガでは大差はなかった。つまり、年齢には関係なく、ある一定程度の健康状態でないと野宿することはできないといえることができる。

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
悪くない	160 66.1%	119 73.0%	46 66.7%	38 71.7%	44 57.1%	407 67.4%
悪い	82 33.9%	44 27.0%	23 33.3%	15 28.3%	33 42.9%	197 32.6%
列合計 比率	242 40.1%	163 27.0%	69 11.4%	53 8.8%	77 12.7%	604 100.0%
Test		ChiSquare	Prob>ChiSq			
Likelihood Ratio		6.591	0.1591			
Pearson		6.661	0.1549			

表 8.13: 健康と「生活」変数

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	130 53.5%	70 42.9%	33 47.8%	23 43.4%	39 50.6%	295 48.8%
なし	113 46.5%	93 57.1%	36 52.2%	30 56.6%	38 49.4%	310 51.2%
列合計 比率	243 40.2%	163 26.9%	69 11.4%	53 8.8%	77 12.7%	605 100.0%
Test		ChiSquare	Prob>ChiSq			
Likelihood Ratio		5.145	0.2727			
Pearson		5.134	0.2738			

表 8.14: 病気・けがと「生活」変数

8.3.3 仕事意欲と生活変数

次に、体力と健康状態について各層がどのように自覚しているか、主観的に判断しているかについて、求職活動なし理由と生活変数の関係、希望の仕事内容と生活変数の関係からみていく。

求職活動なしの理由と生活変数のクロス表をみると（表 8.15）、健康状態、病気・ケガと関係する「疾病・障害」について割合をみると「無職・求職活動なし」層で高く、「廃品回収・月収3万円以上」層で高く、「廃品回収以外従事」層で低い。年齢と関係する「年齢による体力低下」について割合をみると、「廃品回収・月収3万円未満」層で高く、「廃品回収以外従事」層では低い。「手配師」についてみても各層で大差はない。「仕事減少」についてみると、「廃品回収・月収3万円以上」層で高く、「廃品回収以外従事」層で低い。

度数 行% 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動なし	行合計 比率
疾病・障害	15 45.5 % 11.2 %	5 15.2 % 5.7 %	1 3.0 % 4.3 %	12 36.4 % 15.8 %	33 100.0 % 10.3 %
年齢	34 54.8 % 25.4 %	14 22.6 % 16.1 %	2 3.2 % 8.7 %	12 19.4 % 15.8 %	62 100.0 % 19.4 %
手配師	5 41.7 % 3.7 %	2 16.7 % 2.3 %	1 8.3 % 4.3 %	4 33.3 % 5.3 %	12 100.0 % 3.8 %
仕事減少	55 42.6 % 41.0 %	44 34.1 % 50.6 %	5 3.9 % 21.7 %	25 19.4 % 32.9 %	129 100.0 % 40.3 %
列合計 比率	134 41.9 %	87 27.2 %	23 7.2 %	76 23.8 %	320 100.0 %

表 8.15: 求職活動をできない理由と生活変数

以上より、求職活動なしの理由として年齢、体力に関係する選択肢を選んでいる割合が高いのは、「廃品回収・月収3万円未満」層と「無職・求職活動なし」層で、年齢、体力に関係しない選択肢（仕事減少・その他）を選んでいる割合が高いのは、「廃品回収・月収3万円以上」層と「廃品回収以外従事」層であるということが出来る。つまり年齢と生活変数で「廃品回収」層の中で高齢層である「廃品回収・月収3万円未満」層と「無職」層で高齢層の「無職・求職活動なし」層で、年齢、体力に関係する選択肢を選んでいる割合が高いということも出来る。これは、生活変数が年齢と強い関係があるため、年齢変数と関係性のある求職活動なし理由と生活変数にも関係がある結果になったと思われる。

度数 行% 列%	廃品回収 ・月収3 万円未満	廃品回収 ・月収3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求 職活動 あり	行合計 比率
なんでも よい	92 48.9 % 44.4 %	52 27.7 % 37.4 %	22 11.7 % 41.5 %	22 11.7 % 43.1 %	188 100.0 % 41.8 %
技術技能	52 40.6 % 25.1 %	53 41.4 % 38.1 %	8 6.3 % 15.1 %	15 11.7 % 29.4 %	128 100.0 % 28.4 %
軽作業	42 64.6 % 20.3 %	13 20.0 % 9.4 %	7 10.8 % 13.2 %	3 4.6 % 5.9 %	65 100.0 % 14.4 %
安定した 仕事	13 34.2 % 6.3 %	14 36.8 % 10.1 %	6 15.8 % 11.3 %	5 13.2 % 9.8 %	38 100.0 % 8.4 %
高賃金	2 40.0 % 1.0 %	1 20.0 % 0.7 %	1 20.0 % 1.9 %	1 20.0 % 2.0 %	5 100.0 % 1.1 %
その他	21 38.9 % 10.1 %	16 29.6 % 11.5 %	10 18.5 % 18.9 %	7 13.0 % 13.7 %	54 100.0 % 12.0 %
列合計 比率	207 46.0 %	139 30.9 %	53 11.8 %	51 11.3 %	450 100.0 %

表 8.16: 希望の仕事内容と生活変数

度数 行% 列%	45歳未 満	45歳以上 55歳未 満	55歳以上 65歳未 満	65歳以 上	行合計 比率
なんでも よい	20 8.7 % 41.7 %	84 36.4 % 42.9 %	107 46.3 % 44.0 %	20 8.7 % 32.3 %	231 100.0 % 42.1 %
技術技能	12 8.1 % 25.0 %	57 38.3 % 29.1 %	66 44.3 % 27.2 %	14 9.4 % 22.6 %	149 100.0 % 27.1 %
軽作業	4 4.9 % 8.3 %	22 26.8 % 11.2 %	37 45.1 % 15.2 %	19 23.2 % 30.6 %	82 100.0 % 14.9 %
安定した 仕事	6 13.6 % 12.5 %	18 40.9 % 9.2 %	18 40.9 % 7.4 %	2 4.5 % 3.2 %	44 100.0 % 8.0 %
高賃金	2 28.6 % 4.2 %	3 42.9 % 1.5 %	2 28.6 % 0.8 %	0 0.0 % 0.0 %	7 100.0 % 1.3 %
その他	9 13.0 % 18.8 %	23 33.3 % 11.7 %	24 34.8 % 9.9 %	13 18.8 % 21.0 %	69 100.0 % 12.6 %
列合計 比率	48 8.7 %	196 35.7 %	243 44.3 %	62 11.3 %	549 100.0 %

表 8.17: 「年齢」と転職希望職種

また、希望の仕事内容と生活変数のクロス表をみると（表 8.16）、希望の仕事として「軽作業」と回答している割合が「廃品回収・月収3万円未満」層で高く、「無職・求職活動あり」層で低い。希望の仕事を「軽作業」と選ぶ理由として、体力低下を自覚しているためと考えられる。確かに年齢変数と転職希望職種（表 8.17）からも分かるように体力低下を感じるのは高齢である。その結果「廃品回収」層で高齢層の「廃品回

収・月収3万円未満」層で「軽作業」の割合が高かったと推測される。また、「無職・求職活動あり」層で「軽作業」の割合が低かったのは、「無職」層でも「無職・求職活動あり」は若年者層であったためと思われる。

以上、生活変数と年齢、年齢に関係すると思われる変数（健康状態、病気・ケガ、求職活動なし理由、希望の仕事内容）を見てきて、生活変数と年齢には強い関係性があることはわかった。一方、健康状態、病気・ケガなど、個人の意識を判断するような抽象的な質問項目に関しては、各層で差異はみられなかったが、求職活動なし理由、希望の仕事など、具体的な内容をきく質問項目に関しては、各層で差異が見られるという結果になった。

8.3.4 行政施策と生活変数

自立支援センター希望の有無と生活変数のクロス表をみると（表 8.18）、「無職・求職活動なし」層で「あり」と回答している割合が他の層と比べて著しく低い。これは、自立支援センターが仕事を中心とした施設であることを考えれば、求職意欲が減退している層である「無職・求職活動なし」層の「あり」と回答している割合が低いことも理解できる。また、生活ケアセンター希望の有無と生活変数のクロス表をみると（表 8.19）、「廃品回収以外従事」層と「無職・求職活動なし」層で「あり」と回答している割合が低い。これは、生活ケアセンターが身体を休める施設であることを考えれば、65歳

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	136 56.7 %	84 53.2 %	33 49.3 %	31 59.6 %	26 34.7 %	310 52.4 %
なし	104 43.3 %	74 46.8 %	34 50.7 %	21 40.4 %	49 65.3 %	282 47.6 %
列合計 比率	240 40.5 %	158 26.7 %	67 11.3 %	52 8.8 %	75 12.7 %	592 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 12.706 0.0128
Pearson 12.595 0.0134

表 8.18: 自立支援センター希望と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	107 44.0 %	61 38.1 %	19 27.5 %	25 48.1 %	23 30.7 %	235 39.2 %
なし	136 56.0 %	99 61.9 %	50 72.5 %	27 51.9 %	52 69.3 %	364 60.8 %
列合計 比率	243 40.6 %	160 26.7 %	69 11.5 %	52 8.7 %	75 12.5 %	599 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 10.607 0.0314
Pearson 10.405 0.0341

表 8.19: 生活ケアセンター希望の有無と生活変数

以上の高齢者層が少ない「廃品回収以外従事」層が「あり」と回答している割合が低いことも理解できる。しかし、「無職・求職活動なし」層では高齢者層が多いにもかかわらず、「あり」の回答が低い。この理由として、施設を好まない、もしくは行政に対する不信感が高いなど、いくつかの可能性を考えることはできる。

8.3.5 要望と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	199 81.2 %	125 76.2 %	54 78.3 %	47 88.7 %	50 64.9 %	475 78.1 %
なし・ 無回答	46 18.8 %	39 23.8 %	15 21.7 %	6 11.3 %	27 35.1 %	133 21.9 %
列合計 比率	245 40.3 %	164 27.0 %	69 11.3 %	53 8.7 %	77 12.7 %	608 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 12.765 0.0125
Pearson 13.02 0.0112

表 8.20: 行政への要望の有無と生活変数

そこで、生活変数と行政への要望の有無の関係をみていく。

行政への要望の有無と生活変数のクロス表をみると（表 8.20）、「無職・求職活動なし」層は他の層と比べ

て、行政への要望「あり」と回答している割合が著しく低い。

以上、行政による支援策である、自立支援センター希望の有無、生活ケアセンター希望の有無、また行政への要望の有無についてみてきたが、すべてにおいて「あり」と回答している割合が「無職・求職活動なし」層では低い。

では、「無職・求職活動なし」層とは、要望の少ない層なのである

うか。以下、現在の生活への不満の有無と今後の生活への不安について「無職・求職活動なし」層を中心に関係性をみていく。

現在の生活の不満の有無と生活変数の関係をみると（表 8.21）、現在の生活不満「あり」と回答している割合は各層で大差はなかった。今後の生活の不安の有無と生活変数の関係をみると（表 8.22）、今後の生活の不安「あり」と回答している割合は、「廃品回収以外従事」層、「無職・求職活動なし」層で若干少ないものの、各層で大差はみられなかった。

以上まとめると、現在の生活の不満の有無、今後の生活の不安の有無では、各層で大差は見られなかった、つまり要望について言えば各層で大差がないにもかかわらず、行政による支援策を切望していない層、「無職・求職活動なし」層の存在が分かった。

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	73 29.8 %	49 29.9 %	21 30.4 %	13 24.5 %	23 29.9 %	179 29.4 %
なし・ 無回答	172 70.2 %	115 70.1 %	48 69.6 %	40 75.5 %	54 70.1 %	429 70.6 %
列合計 比率	245 40.3 %	164 27.0 %	69 11.3 %	53 8.7 %	77 12.7 %	608 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 0.707 0.9504
Pearson 0.685 0.9531

表 8.21: 現在の生活の不満と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事」層	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	122 49.8 %	88 53.7 %	28 40.6 %	28 52.8 %	32 41.6 %	298 49.0 %
なし・ 無回答	123 50.2 %	76 46.3 %	41 59.4 %	25 47.2 %	45 58.4 %	310 51.0 %
列合計 比率	245 40.3 %	164 27.0 %	69 11.3 %	53 8.7 %	77 12.7 %	608 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 5.485 0.241
Pearson 5.461 0.2432

表 8.22: 今後の生活の不安の有無と生活変数

ではなぜこのような層が生じたのだろうか。生活変数とその経歴（釜ヶ崎経験と野宿経験）、生活変数と現在の生活の関係を見ていくことによって、各層の特徴を確かめていきたいと思う。

8.3.6 釜ヶ崎・建設業従事と生活変数

野宿に至るまでの職歴キャリアと、野宿（生活）の有り様との間には明確な差異が見られる。

「釜ヶ崎往還」層である割合は、「廃品回収以外従事」層で際立って高く、「無職・求職活動なし」層で際立って低い（表 8.23）。「釜ヶ崎離脱」層である割合は、「廃品回収・月収 3 万円未満」層、「廃品回収・月収 3 万円以上」層で際立って高く、「無職・求職活動なし」層で低い。「非釜ヶ崎・建設」層である割合は、「無職・求職活動なし」層で際立って高く、「廃品回収・月収 3 万円未満」層、「廃品回収・月収 3 万円以上」層、「廃品回収以外従事」層で低い。「非釜ヶ崎・非建設」層である割合は、「無職・求職活動なし」層で際立って高く、「廃品回収・月収 3 万円未満」層、「廃品回収・月収 3 万円以上」層、「廃品以外従事」層で低い。

これらから次のように言えそうである。現在、野宿をしながら何らかの収入を得るための仕事を持っている層は、これまでに釜ヶ崎での就労を経験したことがある場合が多い。仕事の内容で言えば、廃品回収以外の就労に従事している「廃品回収以外従事」層は、釜ヶ崎経験層の中でも特に、今後釜ヶ崎に日雇労働者として帰還することを想定している層（「釜ヶ崎往還」層）で高い。廃品回収に従事しているのは、釜ヶ崎経験

度数 列%	廃品回収・月収 3万円未満	廃品回収・月収 3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
釜ヶ崎 往還層	63 26.3%	50 31.1%	29 42.6%	14 28.0%	10 13.7%	166 28.0%
釜ヶ崎 離脱層	95 39.6%	55 34.2%	12 17.6%	9 18.0%	9 12.3%	180 30.4%
非釜・ 建設層	53 22.1%	32 19.9%	16 23.5%	15 30.0%	29 39.7%	145 24.5%
非釜・ 非建設	29 12.1%	24 14.9%	11 16.2%	12 24.0%	25 34.2%	101 17.1%
列合計 比率	240 40.5%	161 27.2%	68 11.5%	50 8.4%	73 12.3%	592 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 59.916 <.0001
Pearson 60.272 <.0001

表 8.23: 釜ヶ崎・建設と生活変数

層の中でも特に、釜ヶ崎での就労経験はあるが今後釜ヶ崎に日雇労働者として帰還することを想定していない層（「釜ヶ崎離脱」層）が多い。「廃品回収・月収3万円未満」層／「廃品回収・月収3万円以上」層という廃品回収従事層における収入の違いをみても、そこに過去の職歴キャリアによる違いを見出すことはできない。収入の違いを規定するのは職歴キャリアとは異なる要因であると考えられる。「無職・求職活動あり」層では、過去の職歴キャリアにおける目立った要素は見出せないが、釜ヶ崎を経由していない層がやや多い傾向が見られる。「未就労・未求職」層では、釜ヶ崎を経由していない層が多い。

8.3.7 野宿場所（地域）と生活変数

地域変数と生活変数のクロス表をみると（表 8.24）、「浪速・西成」は「廃品回収・月収3万円未満」層と「廃品回収以外従事」層で割合が高く、「無職・求職活動なし」層で割合が低い。「廃品回収以外従事」層において「浪速・西成」の割合が高いのは、「廃品回収以外従事」層というのは、日雇い、特別清掃などの釜ヶ崎に関係の深い職業に従事している者の割合が高いためと考えられる。次に「天王寺公園」は、「廃品回収以外従事」層と「無職・求職活動なし」層の割合が高い。「天王寺方面」は「廃品回収・月収3万円以上」層の割合が高い。「阿倍野方面」は、「無職・求職活動なし」層が一人も存在してい

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
浪速・西成	39 15.9%	17 10.4%	13 18.8%	5 9.4%	4 5.2%	78 12.8%
天王寺公園	11 4.5%	4 2.4%	7 10.1%	6 11.3%	5 6.5%	33 5.4%
天王寺方面	12 4.9%	17 10.4%	3 4.3%	2 3.8%	5 6.5%	39 6.4%
阿倍野方面	10 4.1%	11 6.7%	2 2.9%	4 7.5%	0 0.0%	27 4.4%
西部方面	12 4.9%	7 4.3%	2 2.9%	2 3.8%	3 3.9%	26 4.3%
長居公園	58 23.7%	36 22.0%	10 14.5%	4 7.5%	15 19.5%	123 20.2%
南部方面	4 1.6%	7 4.3%	2 2.9%	1 1.9%	0 0.0%	14 2.3%
大阪城公園	43 17.6%	28 17.1%	15 21.7%	13 24.5%	17 22.1%	116 19.1%
中之島・大川	24 9.8%	16 9.8%	8 11.6%	6 11.3%	10 13.0%	64 10.5%
扇町公園・北部	11 4.5%	8 4.9%	2 2.9%	2 3.8%	4 5.2%	27 4.4%
東部	4 1.6%	4 2.4%	1 1.4%	0 0.0%	2 2.6%	11 1.8%
淀川河川敷	16 6.5%	8 4.9%	4 5.8%	5 9.4%	8 10.4%	41 6.7%
あべのルシアス 地下連絡通路	1 0.4%	1 0.6%	0 0.0%	3 5.7%	4 5.2%	9 1.5%
列合計 比率	245 40.3%	164 27.0%	69 11.3%	53 8.7%	77 12.7%	608 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 71.506 0.01551
Pearson 68.939 0.0254

表 8.24: 地域変数と生活変数

なかった。「西部方面」は各層で大差は見られなかった。「長居公園」では「無職・求職活動あり」層の割合

が低い。「南部方面」、「中之島・大川」では各層で大差はみられない。「大阪城公園」では、「無職・求職活動あり」層が若干割合が高い。「扇町公園・北部」では、「廃品回収以外従事」層で若干割合が低い。ここまでは公園を中心に聞き取った地域について見てきたが、それらの層とは異なった、河川敷（「淀川河川敷」）、ターミナル（「あべのルシアス地下連絡通路」）においてはどの層の割合が高いかと見てみると、「淀川河川敷」では「無職」層の割合が高く、「あべのルシアス地下連絡通路」においては、全員が「無職」層と特徴的な結果となった。

以上、地域変数と生活変数の関係を見てきて、地域変数と生活変数には関係があるということができる。そしてそのような結果がえられたのは、第12章でも述べているが、地域変数と釜変数には強い関係があること、また、釜ヶ崎経験・建設経験と生活変数の関係が密接であることを考えれば当然のことと言っても構わないのではないだろうか。

それに加え、以下でみていく、野宿形態（テント・非テント）と生活変数の関係（第8.3.8項 野宿形態と生活変数、132ページ）、地域変数と野宿形態（テント・非テント）関係（表8.25）も、地域変数と生活変数の関係に影響しているということが可能である。

度数 列%	テント	非テント	行合計 比率
浪速・西成	76 14.3 %	6 4.3 %	82 12.2 %
天王寺公園	18 3.4 %	21 15.0 %	39 5.8 %
天王寺方面	25 4.7 %	19 13.6 %	44 6.5 %
阿倍野方面	27 5.1 %	1 0.7 %	28 4.2 %
西部方面	15 2.8 %	14 10.0 %	29 4.3 %
長居公園	124 23.3 %	13 9.3 %	137 20.4 %
南部方面	11 2.1 %	3 2.1 %	14 2.1 %
大阪城公園	119 22.4 %	11 7.9 %	130 19.3 %
中之島・大川	46 8.6 %	27 19.3 %	73 10.9 %
扇町公園・北部	26 4.9 %	6 4.3 %	32 4.8 %
東部	11 2.1 %	2 1.4 %	13 1.9 %
淀川河川敷	34 6.4 %	8 5.7 %	42 6.3 %
アベノルシアス 地下連絡通路	0 0.0 %	9 6.4 %	9 1.3 %
列合計 比率	532 79.2 %	140 20.8 %	672 100.0 %
Test	ChiSquare	Prob>ChiSq	
Likelihood Ratio	127.019	<.0001	
Pearson	135.384	<.0001	

表 8.25: 参考表：地域変数と野宿形態

8.3.8 野宿形態と生活変数

野宿形態（テント・非テント）と生活変数の関係をみると（表8.26）、「非テント」層の割合が「無職」層で高い。「廃品回収」層の中で「テント」の割合をみると、「月収3万円以上」層で高い。これは、廃品回収に収入の大半を依存している「廃品回収」層において、テントを張ることでしっかりした生活基盤を作り上げている「テント」層の方が、収入が多いということを示している。「無職」層の中で「テント」層の割合をみると、「求職活動あり」層、「求職活動なし」層で差はなかった。

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
テント	205 83.7 %	148 90.2 %	54 78.3 %	29 54.7 %	43 55.8 %	479 78.8 %
非テント	40 16.3 %	16 9.8 %	15 21.7 %	24 45.3 %	34 44.2 %	129 21.2 %
列合計 比率	245 40.3 %	164 27.0 %	69 11.3 %	53 8.7 %	77 12.7 %	608 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 54.575 <.0001
Pearson 59.007 <.0001

表 8.26: 野宿形態と生活変数

8.3.9 野宿期間と生活変数

次に野宿期間と生活変数の関係についてみていく。

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
8 ヶ月未満	49 20.1 %	23 14.1 %	23 33.8 %	25 50.0 %	23 31.5 %	143 23.9 %
8 ヶ月以上	83 34.0 %	73 44.8 %	15 22.1 %	15 30.0 %	16 21.9 %	202 33.8 %
1 年 8 ヶ月未満	63 25.8 %	39 23.9 %	19 27.9 %	7 14.0 %	13 17.8 %	141 23.6 %
1 年 8 ヶ月以上	49 20.1 %	28 17.2 %	11 16.2 %	3 6.0 %	21 28.8 %	112 18.7 %
3 年 8 ヶ月未満	244 40.8 %	163 27.3 %	68 11.4 %	50 8.4 %	73 12.2 %	598 100.0 %
3 年 8 ヶ月以上						
列合計 比率	244 40.8 %	163 27.3 %	68 11.4 %	50 8.4 %	73 12.2 %	598 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 50.695 <.0001
Pearson 51.688 <.0001

表 8.27: 野宿期間と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	「無職・求職 活動なし	行合計 比率
2 ヶ月未満	9 18.4 %	3 13.0 %	2 8.7 %	10 40.0 %	4 17.4 %	28 19.6 %
4 ヶ月未満	14 28.6 %	4 17.4 %	6 26.1 %	9 36.0 %	10 43.5 %	43 30.1 %
6 ヶ月未満	18 36.7 %	8 34.8 %	7 30.4 %	3 12.0 %	6 26.1 %	42 29.4 %
8 ヶ月未満	8 16.3 %	8 34.8 %	8 34.8 %	3 12.0 %	3 13.0 %	30 21.0 %
列合計 比率	49 34.3 %	23 16.1 %	23 16.1 %	25 17.5 %	23 16.1 %	143 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 20.03 0.0665
Pearson 20.496 0.0583

表 8.28: 野宿期間(8 ヶ月未満) と生活変数

野宿期間と生活変数との関係を見ると(表 8.27、表 8.28)、野宿期間が「8 ヶ月未満」の割合が、「無職・求職活動あり」層で高い。その中でも、野宿期間(8 ヶ月未満)と生活変数のクロス表をみると、「4 ヶ月未満まで」と回答している割合が高い。これより、無職になって4 ヶ月程度は求職意欲が続くといえるかもしれない。次に、野宿期間が「8 ヶ月以上1 年 8 ヶ月未満」の割合が高いのは「廃品回収・月収 3 万円以上」層である。これは、廃品回収で3 万円以上の収入を得るためには、廃品回収のノウハウを習得するためには一定以上の野宿期間が必要であるが、ある程度の体力を温存しておく必要もあると考えたときの野宿期間なのだろうかと推測する。次に、野宿期間が「1 年 8 ヶ月以上3 年 8 ヶ月未満」層の割合は「有職」層で高い

が、このような傾向がこの期間で高い理由はよく分からない。最後に、野宿期間が「3年8ヶ月以上」の割合が高いのは「無職・求職活動なし」層である。これは「無職・求職活動なし」層というのは、他の層に比べて高齢者の割合が高いため、無職になり野宿している期間が長くなっているということ、そして野宿を長期行っているため求職活動への意欲が減退してきていることを示しているのではないかと推測される。

8.3.10 収入と生活変数

度数 列%	廃品回収	廃品回収 以外従事	行合計 比率
1万円未満	80 19.6%	8 14.5%	88 19.0%
1万円以上 2万円未満	92 22.5%	2 3.6%	94 20.3%
2万円以上 3万円未満	73 17.8%	7 12.7%	80 17.2%
3万円以上 4万円未満	74 18.1%	7 12.7%	81 17.5%
4万円以上 5万円未満	26 6.4%	5 9.1%	31 6.7%
5万円以上 6万円未満	27 6.6%	7 12.7%	34 7.3%
6万円以上	37 9.0%	19 34.5%	56 12.1%
列合計 比率	409 88.1%	55 11.9%	464 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 586.82 <.0001
Pearson 443.331 <.0001

表 8.29: 収入と生活変数

次に、収入、野宿生活の実態（収入、食事、嗜好品、日用生活品）について、生活変数との関係を見ていく。

収入と生活変数の関係性をみるために、収入のある層＝有職層を対象とした。そして、「廃品回収」層を、「月収3万円未満」「月収3万円以上」で分類しないで、「廃品回収」層と「廃品回収以外従事」層の二分類で、収入と生活変数の関係を見ていく。

「有職」層について収入の分布をみると（表 8.29）、収入「1万円以上2万円未満」の割合が「廃品回収以外従事」層で非常に低い。また収入「6万円以上」の割合が「廃品回収以外従事」層で非常に高い。「廃品回収」層は「廃品回収以外従事」層と比較して、収入が4万円未満の割合が高い。これは、「廃品以外従事」層の仕事内容に、廃品回収と比較して1日の労働で高収入をえることができる「日雇」が含まれているためと考えられる。

生活変数作成の時「廃品回収」層を月収で分類していること、「無職」層は収入がないこと、また上で見たように「廃品回収」層、「廃品回収以外従事」層と収入の間に関係性があることなどから、収入と生活変数は関係性が強いということが出来る。では、収入に大きく影響をうけると思われる野宿生活の実態について生活変数との関係を見ていく。

8.3.11 食事と生活変数

食事の獲得方法と生活変数の関係性をみると（表 8.30）、「自炊」と回答している割合が「廃品回収」層で高く、「無職」層で低い。これは、野宿形態が「テント」という「自炊」することが可能な環境かどうかによると考えられる。次に「廃棄食品」、「残飯」の割合が「廃品回収・月収3万円未満」層、「無職」層で高い。特に「無職・求職活動なし」層で高い。これは、「廃棄食品」と「残飯」という食事の獲得方法は、収入がない層（「無職」層）、または収入が少ない層（「廃品回収・月収3万円未満」層）にとって、生きるために必要な最低限の食事を確保する手段であるということが出来る。これは、「廃品回収・月収3万円未満」層、「無職」層では食事を確保するのにも困難な状況であるということが出来る。

8.3.12 嗜好品と生活変数

「酒を飲む」と回答している割合が「無職」層で、特に「無職・求職活動なし」層で低い（表 8.31）。これは、もともと飲まない人が「無職」層に集まっているというよりは、嗜好品である酒を飲むほど余裕がない野宿生活者が「無職」層で多いということが出来るのではないだろうか。以下に、酒獲得方法と生活変数の関係性をみる。

酒獲得方法をみると（表 8.32）、「買う」と回答している割合が「有職」層で高く、「無職」層で低い。「買う」という行為は収入がなければできない。つまり、この結果は収入があるかどうか、収入を得るための仕事をしているかによると考えられる。

先ほど、飲酒では「有職」層か「無職」層かで差異が見られたが、喫煙については（表 8.33）、「吸う」と

度数 行% 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率 比率
炊き出し	20 37.7 % 8.2 %	10 18.9 % 6.1 %	7 13.2 % 10.1 %	7 13.2 % 13.5 %	9 17.0 % 12.0 %	53 100.0 % 8.8 %
自炊	160 44.0 % 65.3 %	122 33.5 % 74.4 %	39 10.7 % 56.5 %	17 4.7 % 32.7 %	26 7.1 % 34.7 %	364 100.0 % 60.2 %
食堂・弁当	60 34.1 % 24.5 %	59 33.5 % 36.0 %	27 15.3 % 39.1 %	15 8.5 % 28.8 %	15 8.5 % 20.0 %	176 100.0 % 29.1 %
廃棄食品	91 49.2 % 37.1 %	31 16.8 % 18.9 %	14 7.6 % 20.3 %	17 9.2 % 32.7 %	32 17.3 % 42.7 %	185 100.0 % 30.6 %
残飯	24 50.0 % 9.8 %	8 16.7 % 4.9 %	2 4.2 % 2.9 %	5 10.4 % 9.6 %	9 18.8 % 12.0 %	48 100.0 % 7.9 %
仲間から	51 46.4 % 20.8 %	20 18.2 % 12.2 %	9 8.2 % 13.0 %	13 11.8 % 25.0 %	17 15.5 % 22.7 %	110 100.0 % 18.2 %
その他	26 35.6 % 10.6 %	17 23.3 % 10.4 %	8 11.0 % 11.6 %	12 16.4 % 23.1 %	10 13.7 % 13.3 %	73 100.0 % 12.1 %
列合計 比率	245 40.5 %	164 27.1 %	69 11.4 %	52 8.6 %	75 12.4 %	605 100.0 %

表 8.30: 食事手段と生活変数

回答している割合が「無職・求職活動なし」層で若干低くなっているが、各層で大差はない。

タバコ獲得方法については（表 8.34）、先ほど述べた酒獲得方法と同様の結果がえられた。つまり、「タバコを買う」と回答している割合が「無職」層で低い。

以上嗜好品（酒・タバコ）と生活変数にみてきたが、嗜好品と生活変数の関係は、嗜好品と収入の関係と
いってよいだろう。

度数 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
飲む	128 62.4 %	110 75.9 %	36 65.5 %	21 51.2 %	23 37.7 %	318 62.7 %
飲まない	66 32.2 %	34 23.4 %	17 30.9 %	19 46.3 %	32 52.5 %	168 33.1 %
飲めない	11 5.4 %	1 0.7 %	2 3.6 %	1 2.4 %	6 9.8 %	21 4.1 %
列合計 比率	205 40.4 %	145 28.6 %	55 10.8 %	41 8.1 %	61 12.0 %	507 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 35.211 <.0001
Pearson 34.296 <.0001

表 8.31: 飲酒と生活変数

8.3.13 日用生活品と生活変数

日用生活品調達方法と生活変数の関係を見ると（表 8.35）「買う」と回答している割合が「廃品回収以外従事」層で高い。これは収入のところでも述べたが（第 8.3.10 項）、「廃品回収以外従事」層が他の層に比べて収入が高いためと思われる。「粗大ごみ」と回答している割合が「廃品回収」層に高い。これは「廃品」を回収する際、日用生活品も同時に獲得していると考えられる。「その他」と回答している割合が「無職」層で高い。今回、日用生活品の調達方法「その他」が具体的にどのような内容かわからないが、「無職」層は他の層とは異なった手段で日用生活品を調達している層が多いと言える。これより、日用生

度数 行% 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
買う	108 41.9 % 91.5 %	99 38.4 % 97.1 %	28 10.9 % 80.0 %	11 4.3 % 61.1 %	12 4.7 % 60.0 %	258 88.1 %
もらう	17 36.2 % 14.4 %	7 14.9 % 6.9 %	10 21.3 % 28.6 %	7 14.9 % 38.9 %	6 12.8 % 30.0 %	47 100.0 % 16.0 %
捨う	4 36.4 % 3.4 %	4 36.4 % 3.9 %	0 0.0 % 0.0 %	0 0.0 % 0.0 %	3 27.3 % 15.0 %	11 100.0 % 3.8 %
列合計 比率	118 40.3 %	102 34.8 %	35 11.9 %	18 6.1 %	20 6.8 %	293 100.0 %

表 8.32: 酒獲得方法と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
吸う	182 84.3 %	134 88.7 %	47 82.5 %	37 80.4 %	48 75.0 %	448 83.9 %
吸わない	29 13.4 %	17 11.3 %	9 15.8 %	7 15.2 %	14 21.9 %	76 14.2 %
吸えない	5 2.3 %	0 0.0 %	1 1.8 %	2 4.3 %	2 3.1 %	10 1.9 %
列合計 比率	216 40.4 %	151 28.3 %	57 10.7 %	46 8.6 %	64 12.0 %	534 100.0 %

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 12.021 0.1503
Pearson 10 0.265

表 8.33: 喫煙と生活変数

活品調達方法は、収入、仕事内容に大きく依存しているといえる。

以上、食事、嗜好品、日用生活品の調達方法を見てきたが、収入つまり仕事内容によって生活が大きく左右されているといえるであろう。それ以外にも、仕事内容により生活が決定されていると思われる項目について、いくつかの項目についてみていく。

8.3.14 仕事時間帯と生活変数

仕事時間帯と生活変数の関係をみると（表 8.36）、「廃品回収」層は「深夜」、「早朝」の割合が高く、「廃品回収以外従事」層については「昼間」の割合が高い。「廃品回収」層の中でみると、「月収3万円未満」層は「夜間から早朝にかけて」就労し、「月収3万円以上」層は「早朝から昼間にかけて」就労しているという傾向がうかがえる。

度数 行% 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
買う	143 41.4 % 84.1 %	124 35.9 % 96.9 %	39 11.3 % 84.8 %	20 5.8 % 57.1 %	19 5.5 % 42.2 %	345 81.4 %
もらう	29 42.6 % 17.1 %	6 8.8 % 4.7 %	9 13.2 % 19.6 %	9 13.2 % 25.7 %	15 22.1 % 33.3 %	68 100.0 % 16.0 %
捨う	29 50.0 % 17.1 %	4 6.9 % 3.1 %	3 5.2 % 6.5 %	8 13.8 % 22.9 %	14 24.1 % 31.1 %	58 100.0 % 13.7 %
列合計 比率	170 40.1 %	128 30.2 %	46 10.8 %	35 8.3 %	45 10.6 %	424 100.0 %

表 8.34: タバコ獲得方法と生活変数

度数 行% 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
買う	55 31.1 % 22.5 %	59 33.3 % 36.6 %	32 18.1 % 49.2 %	15 8.5 % 29.4 %	16 9.0 % 21.6 %	177 100.0 % 29.7 %
粗大ごみ	206 47.6 % 84.4 %	131 30.3 % 81.4 %	32 7.4 % 49.2 %	25 5.8 % 49.0 %	39 9.0 % 52.7 %	433 100.0 % 72.8 %
仲間	28 36.4 % 11.5 %	16 20.8 % 9.9 %	11 14.3 % 16.9 %	8 10.4 % 15.7 %	14 18.2 % 18.9 %	77 100.0 % 12.9 %
市民 ボラン ティア	28 43.1 % 11.5 %	19 29.2 % 11.8 %	5 7.7 % 7.7 %	4 6.2 % 7.8 %	9 13.8 % 12.2 %	65 100.0 % 10.9 %
その他	31 34.4 % 12.7 %	17 18.9 % 10.6 %	10 11.1 % 15.4 %	13 14.4 % 25.5 %	19 21.1 % 25.7 %	90 100.0 % 15.1 %
列合計 比率	244 41.0 %	161 27.1 %	65 10.9 %	51 8.6 %	74 12.4 %	595 100.0 %

表 8.35: 日常生活品調達方法と生活変数

度数 行% 列%	廃品回収・月 収 3 万円未満	廃品回収・月 収 3 万円以上	廃品回収 以外従事	行合計 比率
昼間	83 41.9 % 39.2 %	83 41.9 % 54.6 %	32 16.2 % 68.1 %	198 100.0 % 48.2 %
夜間	113 58.2 % 53.3 %	65 33.5 % 42.8 %	16 8.2 % 34.0 %	194 100.0 % 47.2 %
早朝	160 51.6 % 75.5 %	122 39.4 % 80.3 %	28 9.0 % 59.6 %	310 100.0 % 75.4 %
列合計 比率	212 51.6 %	152 37.0 %	47 11.4 %	411 100.0 %

表 8.36: 仕事時間帯と生活変数

8.3.15 人間関係と生活変数

野宿者間のつきあいの有無と、生活変数には関係を見ることができない（表 8.37）。各層とも 8 割前後、野宿者との付き合い「あり」と回答している。

同居人と生活変数の関係を見ると（表 8.38）、「一人」と回答している割合が「無職・求職活動あり」層で高い。

親しい仲間の数と生活変数の関係を見ると（表 8.39）、「無職」層、「廃品回収」層、「廃品回収以外従事」層の順番で親しい仲間の数が多い割合が増えていく。また「廃品回収」層の中では、「月収 3 万円未満」層より「月収 3 万円以上」層の方が、親しい仲間の数の多い割合が高い。また「無職」層の中では、「求職活動なし」層より「求職活動あり」層の方が親しい仲間の数が多い割合が高い。以上より、親しい仲間の数が、つまりネットワーク、情報の獲得可能性と生活変数には関係があるということが出来る。

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
あり	194 79.5%	137 83.5%	55 80.9%	39 73.6%	56 72.7%	481 79.4%
なし	50 20.5%	27 16.5%	13 19.1%	14 26.4%	21 27.3%	125 20.6%
列合計 比率	244 40.3%	164 27.1%	68 11.2%	53 8.7%	77 12.7%	606 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 4.889 0.2989
Pearson 4.995 0.2878

表 8.37: 野宿者間のつきあいの有無と生活変数

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
一人	221 90.2%	142 86.6%	61 88.4%	51 96.2%	66 85.7%	541 89.0%
友人・知り合い	19 7.8%	11 6.7%	5 7.2%	1 1.9%	2 2.6%	38 6.3%
妻・親族	5 2.0%	11 6.7%	3 4.3%	1 1.9%	9 11.7%	29 4.8%
列合計 比率	245 40.3%	164 27.0%	69 11.3%	53 8.7%	77 12.7%	608 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 18.606 0.0171
Pearson 18.658 0.0168

表 8.38: 同居人と生活変数

8.4 まとめ

仕事変数は釜変数と関係が非常に強い。仕事変数で「有職」層は「釜ヶ崎」層である割合が高く、仕事変数で「無職」層は「非釜ヶ崎」層である割合が高い。

生活変数と年齢には関係がある。「廃品回収」層では「月収が少ない」層で、「無職」層では「求職活動していない」層で高齢者の割合が高い。そして、生活変数と年齢変数に関係があるにもかかわらず、健康、病気・けがとは関係性があるとは言えない。これより健康状態に関係なく、過酷な条件で野宿生活をおくっているということがわかる。ただし、健康状態については医師の診断を受けたわけではないので、本人がどのように自覚しているかという主観的なものである。よって、求職活動をしない理由や希望の仕事内容などのように具体的な内容を回答する部分で隠れていた年齢との関係があらわれている。

生活変数と要望には関係がある。現在の生活の不満「あり」、今後の生活の不安「あり」と回答している割

度数 列%	廃品回収・月 収3万円未満	廃品回収・月 収3万円以上	廃品回収 以外従事	無職・求職 活動あり	無職・求職 活動なし	行合計 比率
0人	14 8.2%	16 14.0%	9 18.4%	6 19.4%	12 25.0%	57 13.8%
1人から3人	95 55.6%	42 36.8%	23 46.9%	17 54.8%	23 47.9%	200 48.4%
4人から5人	41 24.0%	37 32.5%	5 10.2%	5 16.1%	6 12.5%	94 22.8%
6人以上	21 12.3%	19 16.7%	12 24.5%	3 9.7%	7 14.6%	62 15.0%
列合計 比率	171 41.4%	114 27.6%	49 11.9%	31 7.5%	48 11.6%	413 100.0%

Test ChiSquare Prob>ChiSq
Likelihood Ratio 30.928 0.002
Pearson 30.563 0.0023

表 8.39: 親しい仲間の数と生活変数

合は各層で大差はないにもかかわらず、行政への要望について「あり」と回答している割合は「無職・求職活動なし」層で著しく低い。

生活変数は釜ヶ崎・建設業変数と関係がある。現在どのような職種についているかは、釜ヶ崎で就労の経験があるかどうか、釜ヶ崎で回収業のノウハウを覚えているかによるところが大きい。

生活変数と野宿場所には関係がある。これは生活変数が釜変数と関係があり、釜変数は野宿場所に関係があるためと考えられる。野宿場所と生活変数とは疑似関係ということができるのではないだろうか。

生活変数と野宿期間には関係がある。野宿期間が「8ヶ月未満」の割合が高いのは「無職・求職活動あり」層で、この層には釜ヶ崎で仕事まちをしている層が含まれている。

収入と「生活」変数には有意な関係がある。「廃品回収」層が「廃品以外従事」層に比し収入が低い傾向にあるのは、「廃品以外従事」層に、比較的高収入の得られる日雇仕事をしている人が含まれていることが影響している。生活変数作成の時「廃品回収」層を月収で分類していること、「無職」層は収入がないこと、また既述のように「廃品回収」層、「廃品回収以外従事」層と収入の間に関係性があることなどから、収入と生活変数は関係性が強いということができる。

仕事時間帯と「生活」変数には関係にある。廃品回収従事の有無においてまず、「廃品回収以外従事」層が昼間働いてる傾向がある一方、「月収3万円以上」層では「夜間から早朝」、「月収3万円未満」層は「早朝から昼間」にかけて従事している傾向がある。

人間関係と「生活」変数には関係がある。野宿者間の「つきあい」の有無だけ見ると、差は見られないが、その中で親しい仲間がどれだけいるか、すなわち必要な情報を獲得しうるネットワークの所持状況と「生活」変数とが関係あるといえる。